

佛教における戦争體驗 (四)

市川白弦

「われわれはなすべき義務を果さねばならない。わが國自體のためばかりでなく、共產主義の脅威から東洋を防衛するためにも、軍備を發展させねばならない。韓國との關係は、日本の安全の見地から、考えねばならない。もし韓國がコミュニストに乗つとられるならば、對島海峽は日本防衛にとつて、十分でなくなるだろう。われわれは核兵器について、文句ばかりいつておるべきではない。必要とあらば、自ら核兵器を持つ決意を、もたねばならない。We should not grumble about and criticize nuclear weapons. We must have the determination to have nuclear weapons ourselves if need be.」(神宮皇學館大學總裁吉田茂氏、一九六二年七月十二日、日米協會中食會において、外遊歸國報告のなかの言葉、「ジャパン・タイムズ」、七月十三日)

内容

四、(昭和一九・四—二〇・九)

五、後篇・序章—戦争體驗が提起する諸問題(頁三二)

四 (昭和一九・四—二〇・九)

一九四四(昭一九)。四月。ソ連軍オデッサ奪回。ヒトラ―暗殺計畫失敗。文部省、學徒勤勞動員本部設置。「文學界」廢刊。「四月十二日。公^(近)」は昨夜東久邇宮殿下に拜謁し、自分としてはこのまま東條にやらせる方がよいと思う、と申し上げた。それは、若し替えて戦争がうまく行く様ならば当然替えるがよいが、若し萬一替えても悪いと云うことならば、せつかく東條がヒトラ―と共に、世界の憎まれ者になつてゐるのだから、彼に全責任を負わしめる方がよいと思う。米國は我皇室に對し奉り、如何なる態度をとるか不明なるも……個人の責任即ち陛下の責任は云々するかも知れぬが、皇室と云うが如き觀念は、彼等には少いし、加うるに東條に全責任を

押しつけければ、幾分なりとその方を緩和することが出来るかもしれない。それが途中で二三人交替すれば、誰が責任者であるかが、判きりしないことになる……」⁽¹⁾

この頃から國內に流言飛語、東條への誹謗、「不敬の言動」が増加した。「不敬の言動」を當時の警察は五つに分類した。「イ、敗戦必至を前提として陛下の御將來に不吉なる臆測を爲すもの。ロ、敗戦後、戦争の責任は當然陛下が負い奉るべきなりと爲すもの。ハ、戦局悪化の責任を長くも陛下の無能力にありと爲し奉るもの。ニ、戦争の惨禍を國民に與えたるものは、陛下なりとして之を呪詛し奉るもの。ホ、陛下は戦争圈外に遊惰安逸の生活を爲し居るとして、之を怨嗟し奉るもの。」たとえば「天皇は黒磯とか日光とかに、東條から別荘を建ててもらつて……」^(言辭、犯)「天皇は呑氣に寫眞にうつて居るが、人の子供をうんと殺して、こげな大きな顔をして居る。」^(言辭、犯)「日本が負けて天皇陛下はどうなるやろう」^(人檢舉)「天皇陛下は淡路島でも貰うやろう」^(言辭、犯)「そんなことはない。どこか南洋か外國へ連れて行かれるのやないかと思ふな。」^(言辭、犯)「戦争に負けたところで、我々は殺される心配はない。殺されるのは天皇や大臣等の幹部ばかりだ……」^(言辭、犯)^(人檢舉)

「毎朝七、八時頃、飛行機の音春眠を妨ぐ。其音響は、

鍋の底のこげつきたるをガリガリと引搔くようにて、いかにも機械の安物なるを思わしむ。そは兎も角、毎朝東京の空を飛行して、何の爲す所あるや。東京を守らむとするには、其周圍數里の外に備る所なかる可からず。徒に騒音を市民の頭上に浴びせかけて、得意満々たる軍人の愚劣、是亦大いに笑うべきなり……食物關値覺書、白米一升金拾圓也、酢一合金壹圓也、食パン一片金貳圓四拾錢也、醬油一升金拾圓也、澤庵一本金五圓也、するめ一枚金壹圓也、バター一斤貳拾圓也、鶏肉一羽金貳拾五圓也、玉子一個金七拾錢也、砂糖一貫目金百貳拾圓也。」^(荷風)^(日曆)

「惟神道と佛教精神」によれば、「軍神杉本五郎中佐の遺著『大義』の劈頭に、『孝ならん』とせば、大義に透徹せよ。大義に透徹せんと欲せば、須く先ず禪教に入つて我執を去れ。若し根器堪えずんば、他の宗乘に依れ。戒むらくば、宗域に止つて奴となる勿れ。唯々我執を去るを專要とす」と提唱されているが、茲に謂わゆる大義とは、惟神道に基づく忠義に外ならないから、日本傳統の忠孝一致の道義に徹する爲には、何をさし措いても先ず我執を去る方途を教うる禪、その他の己が機根に適應する佛門に歸依せよ、という趣旨であつて……『沙石集』の作者として著名な無住上人が、『一代諸教方便の門は廣けれど、唯衆生の執心を除きて、無我の理に入る外

所詮なし。」と道破されたのは、佛法極意の闡揚といふべきである。茲に我が國固有の惟神道に對して、普遍性を有つ哲學的根據を附與し、個性適應の實踐道を開示する、日本佛教獨自の使命が存する。⁽⁸⁾「時局と宗教々育」によれば、「必勝の信念は……宗教の力に依つてのみ抱き得る……必勝の信念は、それが八紘一字の肇國の理想を顯現せんとする聖戰なるが故に、これを確信し得る……今次の戦争が聖戰たる所以を闡明し、其の基礎理念たる肇國の精神を理解せしめるには、佛教に於ける無我の思想、或いはまた自他一如の精神を把握せしめ徹底せしめることが、最も適切、效果的である。」(同)「佛教の戦争態度」によれば、「戦争を自己と切離して」「これを人事のよう客觀視して」「戦争を評價するのは、「第一義の眞諦を忘れて世俗論」におちこむものであり、「隨處に主となると云うのは、斯ような客觀的態度ではない。」「戦争しながらその是非を反省し……若干の理論的根據を持ちながらのは、知識人の癖である……今勝たねばならない戦争の最中に、こんな思惟の謬法が起るのは、人生の弱點であり、主客分裂の分別智の禍である……無我の根本原理は、主客を分つて物を客觀視する立場の否定である。これは主客一體の下に還つて、一切を己れに吸收すると同時に、自我がそれに没入してしまふことである。今の

問題では戦争が我と一つになることである……。真空の立場に於て、初めて我れも戦争も一體の妙有となつて現前する。驚直に戰う外に何物もないのだ。」(同)

「現代の世界觀と佛教思想」によれば、「華嚴教學に於ける……相即相入して重々無盡なる現實の世界構造を示すこの哲學は、西歐に行わるる全體主義のそれを、遙かに凌駕する……主伴の關係は何等現狀を破ることなく、差別そのまゝ相依相成して一體であるから、一切は凡て絶對の全顯現でなければならぬ。かく一はそれのみにて生起することなく、必らず一切を背負うて生起し、一即多・多即一の有機的全體關係を有し、法々塵々悉く絶對の意味を持つてゐる。この思想は、日本の國家構造や文化性格を説明する場合、屢々應用された……。國家の歴史的現實は、我々の依つて立つべき基盤であり、生命の根源である。現代宗教の基本的課題は、宗教を宗教として飽くまで深くその本質的生命を生かしつつ、而もそれを現實から遊離した、普遍的信仰として抽象化することなく、國家的現實と密接に結合する、國民的宗教として具體化するところにある。倫理的實體としての國家と宗教とは、その深き根柢に於て、當然結合しなければならぬ。」(傍點)(市川)(同)「思想戰と宗教相剋」によれば、大東亞戰の最も重大な要素は思想戰である。皇國護持・聖戰

完遂のために、銃後の總親和を實現しなくてはならぬ。この場合、完全に日本化した佛敎に對し、排佛毀釋的態度を以て臨むのは、一億一心の結束を紊すものであり、國民道德と宗教信仰との限界に對する認識不足である。(同)「國體的信念と佛敎的信念」によれば、この兩者は、一、天皇無窮の皇位、二、三綱建國の皇道、三、一君萬民の大義、四、八紘一字の皇猷に照應する一、常住不滅の佛陀、二、三德三身の佛道、三、一佛萬生の大義、四、通一佛土の豫識として、相互に完全に融會和合する間柄を形成している。(同)

五月。國民總動員運動開始。學校工場化實施を通牒。アメリカ共產黨解散、共產主義政治連盟を結成。中國共產黨、民主民族統一戰線結成を要求。「警察署の役人らしきもの二、三人、折々朝早く網を持ち、觀音堂の鳩數百羽を捕え、ギヤカアに積みて持去る。この後も引つづき鳩狩をなすと云。多年豆を賣りたる老婆供の中、廢業するもの尠からずと云……。この頃鼠の荒れ廻ること甚し。晝の中も臺所に出で、洗濯石鹼を引行くほどなり。雀の子も軒にあつまり居て、洗流しの米粒捨てらるるを待てるが如し。むかしは野良猫いつも物置小屋の屋根に眠り、折々庭に糞をなし行きしが、いつよりともなく其姿を見ぬようになりぬ。東亞共榮圈内に生息する鳥獸、饑餓の

慘狀憫むべし。燕よ。秋を待たで速に歸れ。雁よ。秋來るとも、今年は共榮圈内に來る莫れ。」(荷風)「最近東京デハ、疎開々々ト騒イデ居ル中ニ、軍部デハ東京神樂坂一平莊ヲ買上ゲ、其處ニ酌婦ヲ雇入レ、毎夜ノ様ニ將校連中ガ、酒ヲ飲ンダリ、泊ツタリシテ居ルソウダ。」(五月六日。新潟市、農業團體理事I・K。五月十三日、本人ヲ呼出シ出所究明、他言セザル様嚴諭ス。)

「生死のあきらめ方」によれば、生死解脱とは命を捨てることではなく、欲を捨てることである。吾我をすてることである。それを正法眼藏の生死卷には「ただわが身をも心をもはなちわすれて、佛のいへになげいれて、佛のかたよりおこなわれて、これにしたがいもてゆくとき、ちからをもいれず、ころをもついやさずして、生死をはなれ佛となる」、これを言葉をかえていえば、「その事の如何を問わず、上長の命令に服従し、これに従いもて行く時、直に陛下の股肱として、完全なる兵隊になる。死ねば靖國神社に祭られる。それを「聖人に己れなし、己れならざるところなし」と言う……。涅槃經には悉有佛性と云い、阿含經には無我と云う。これを觀音經には念彼觀音力と云い、杉本中佐はこれを念彼天皇力と云う。か这天皇の力を念ずれば、生死を離れ、幸不幸を超越して戰をする。昔、肇法師は刑に臨んで「五蘊本來

空。頭をもつて白刃に臨む。猶お春風を斬るが如し」と言つたが、これみな天地同根、萬物一體と云うことを體得したからである……。無我の體得である。無我であるから諸法實相の體得となる。これを我が日本の軍隊にすれば、軍旗の下に水火も厭わん。軍旗の下に命も物の數ではないと云う、その境地である。柄はそれで、念彼軍旗力と云う。この軍旗の下に身を捨てて。これは實に無我である。又これが職域では、どの職でも職域奉公となる……即ちみなこれ生死透脱でなければならん。そこに一切衆生、悉有佛性が現前する。⁽⁵⁾

「生死到來如何が廻避せん」によれば、「道元禪師は『生を明らめ死を明むるは佛家一大事の因縁なり』と、曹洞宗安心の『修證義』の卷頭第一にも御示し下さつておる……。『戰陣訓』にも本訓其の二の第七に、軍人の『死生觀』として……と、如何に生死を超越すべきかを示されたのである……本訓其の一の第七『必勝の信念』に於て『信は力なり……』とある……。今や敵米英は、機械化部隊を動員して、我が本土に逼らんとしておる。正に是れ『生死到來、如何が廻避せん』の實際問題ではないか……この禪的公案に參じ來つて、日本を護り、大東亞興隆の責務を全うせねばならぬ。」(同)橋田邦彦「正法眼藏釋意」卷三刊。辻善之助「修訂・皇室と日本精

神」。

六月。マリアナ海戦。大日本言論報國會の言論人總蹕起大會、ヒトラーに激勵電報を送る。連合軍ノルマンディ上陸。フランス解放委員會、共和國臨時政府と改稱。山形のクリスト者鈴木美弼ら治安維持法により檢舉投獄。「改造」休刊。河上肇、西田幾多郎を訪問。長興善郎によれば、「西田は酔うほどに必ず徳富蘇峰を罵倒し、さらに壽岳文章によると、戰時中河上肇を自宅に招いて何かと面倒を見、『節を曲げない君は、今一番愉快な時を送っているのだろう』と羨しがり、かつ河上を勵ましていたそうである。⁽⁶⁾」六月二十八日。最近の投書より見るも、東條ヤメロ、殺セの類より、甚だしきは、東條を御信任遊ばさるの故を以て、不敬に亘るものも増加せり。」(細川護貞日記)「六月初一。風爽なり。午後丸ノ内より日本橋に出で、白木屋にて襯衣など買わむとせしが、女物すこし残れるのみ。男物は一枚もなし。」(荷風 日曆)

七月。サイパン島日本軍全滅。「アメリカ軍はサイパン島の最北端に到達した時、そこで全く信ぜられないような、恐ろしい光景を目撃した。多數の在留邦人が、高い斷崖より、鋸齒狀の岩石が亂立した海中を目掛けて、續々と投身自殺をしていたのだ。その中には、彼らの子供たちをみずから海中へ投げこんで、殺しているものもあ

つた。また日本兵に強要されて、大勢が一團となつて、集團自殺をとげたものもあつた。さらに一部の連中は、一緒に集まつて、手榴彈を爆裂させて爆死をとげた。ときどき日本兵は、自決をこばんで應じなかつた在留邦人を、射殺していた。⁽¹⁾ (この實況を示す米軍フィルムが、戦後日本のテレビで放送された)

米軍テニアン島上陸。東條内閣總辭職、小磯・米内連立内閣成立。憲兵、近衛文麿に尾行、近衛邸荻外荘の電話盜聴開始^(東條内閣)。小學生集團疎開。「中央公論」「改造」廢刊命令、兩社に解散要求。神道者による「宗教團體の皇道化」の要求盛んとなる。「曹洞宗では、戦局の緊迫に鑑み、一宗總蹶起して玉體安寧、皇土安穩、米英撃滅、大東亞戦争必勝を祈願するため、般若心經一千萬卷を淨寫の必勝祈願運動を實施することになつた。妙心寺では、花園天皇六百年聖諱法要の記念事業として、獻納機資金募集中であつたが、花園號第二號として、七月十一日七萬圓を海軍省に獻納、花園天皇陵に参拜報告した。」

「一億玉碎の覺悟」^(禪者)にいう「一億總玉碎の覺悟を要する……見敵必殺、破邪顯正是禪門の要諦である。人を斬らば須らく血を見るべしともある。倒まに鐵馬に騎つて鐵城に入るともある。平素坐禪したのは、斯る一大事の時に役立てるためではないか。」「必勝の神風と雷禪」^(禪者)はいう「今回獨軍の新兵器である無人飛行機の爆裂

による爆風は、鬼畜米英を壓倒して、樞軸側を助ける大神風である。」「戦争禪」^(禪者)にいう「趙州露刃劍、寒霜光焰々、纔擬問如何、分身成兩斷」である。所謂無字の露刃劍である。一刀兩斷あるのみ。」「戦局もだんだん切迫して來た様である。國家存亡とあれば、何事も致さねばならぬが、要するに我々は學問思想の方にて、國家に盡すのが、自分の本分を盡し、眞に國家に盡す所以と存じます。」^(西田・瀧澤克己あて)「御手紙にあつた様に、歴史主義ということを考えるなら、自分というものは歴史の中に居るのだ、と云うことを忘れない様に。從來の歴史の考は、自分を歴史の外に置いて、恰も見る眼の如く、歴史を唯對象的に見て論じて居る。これが從來の哲學の根本的欠點だ。」^(西田・三宅剛一あて)大串兎代夫「天皇御法治の精神」^(中央公論)。

パリの獨軍降伏。軍部・民間人によるヒトラー暗殺未遂事件、プロテスタント牧師ボンヘーファー連坐^(カールト辯護にたつ)。ガンジー、印度國民政府設立案發表。

八月。閣議、一億總武裝決議。大本營・政府連絡會議を廢止、最高戦争指導者會議を置く。學徒・女子挺身隊令公布施行。北ビルマのミチーナの日軍全滅。沖縄の疎開學童七百餘名、一般人千餘名をのせ鹿兒島に向う疎開船對馬丸、魚雷をうけ沈没。「絶対に戦争をしないことだけ

が、犠牲者に捧げるただ一つの花輪である。」(「惡石島」のドキュメント)序文)「停車場のほとりに巡查派出所あり。年わかし職工二、三人、巡查に捕えられ、説諭せらるるを、通行人大勢立止りて見物せり。巡查は扇子にて職工の頭を叩き、威たけ高になり、忠君愛國の道を説くさま、人をして覺えず噴飯せしむ。業平橋にて電車破損して進まず。月よければ歩みて枕橋の方に行くに、二人づれの街娼立ちて人を呼留む。縮髪に白シャツ黒地のズボンはきし姿、一見事務員に彷彿たり。祝儀若干を與えて去る。」(「荷風」小笠原秀實「禪文化の體系」)

西田「哲學論文集第四補遺」によれば、民族的主體が歴史的世界形成力として、絶対現在の自己限定の形をとつたものが、國體である。「國家の根柢に國家成立の神話を有ち、超越即内在、内在即超越的に絶対現在の自己限定として、歴史形成的な我國の歴史に於て、始めて國家即道德の國體というものが、自覺せられた」のであり、國體は民族の直觀體であり、嚴密にいえば「國體というものは我國の外にない。」わが國體においては「天地開闢即肇國として、歴史的世界形成の意義がある。故に萬世一系天壤無窮である。神國という信念の起る所以である。詔に現人神としての神の言葉を聞くということができる……詔というものが絶対と考えられる所以である。

……國家道德というものと道德というものと、二つあるのではない。」われわれの場合、行爲的直觀とは、日本國家形成の神話を起點・主軸として展開した國史の事實に信順し、自己を空じて、絶対現在の中心としての天皇に歸一し奉り、「すべてが皇室から皇室へと……歴史的世界の個として、國體的に行爲する」ことにほかならない。日本精神の極致は現實即絶対であり、皇室は自己自身を形成する歴史的世界の根柢として、「日本國民には絶対的事實である。かかる立場に於て、物は皇室の物であり、事は皇室の事である。」抽象的立場においては、全と個とは相反するが、宗教的な歴史形成の立場においては、兩方向は一でなければならぬ。「かかる立場においては、階級鬭争ということも解消せられねばならない……一つの工場も歴史的世界創造の生産場である。」(「場所的論理と宗教的世界觀」「世界新秩序の原理」において世界平和のための世界戦争を肯定した「絶対無」は、ここで階級鬭争を否定した。このようにして學徒動員、産業報國のための、現實即絶対の事々無礙の哲學がうちたてられた。)

「供出米ヲ出セ／＼ト云ワレテモ、腹一杯喰ベテ餘ツタ分ヲ供出スレバ良イノダ。此ノ位貯金ヤ債券ヲ買ワサルナラバ、戦争ニ早ク負ケテ、アメリカデ政治ヲトツ

テ貰フシカナイ。」(八月十四日、和歌山縣)「完納スルトスレバ、盗ンデ來ルヨリ仕方ナイ……コンナニ無理ヲ強イラレルナラ、米英ノ世話ニナツタ方ガ良イト思フ。」(八月十三日、茨城縣、農業) (四)

赤松元通「無の形而上學」は、禪と西田哲學とを、國體と戦争に結びつけようとする努力の成果であり、検討すべき多くの問題点を含むが、ここでは序文をひいておく。「本書は、學問の據つて立つべき眞の知とは如何なるものであるかを、明らかにせんとしたもの……有無を超えた絶対無とも云うべき、存在に關する眞に深い知は、むしろ無知の知とよぶ外はない……これは我々が眞に己れを空しうして絶対なる道そのものと一つになる所に成立つ所の自覺であつて、最も深い意味の行の知、行爲的直觀に外ならない。『みたみわれ』の自覺、國體への自覺というのも、かくの如き眞の知としての、無知の知に外ならない……無の形而上學は、單なる虚無の形而上學ではなく、我々の學問、道德、歴史、自然、更には國家等一切の事物を、眞にかくあらしめている所の、最深の働、絶対の道そのものの學である。」

「臨濟宗をあげての、米英撃滅の般若心經百萬卷にこめる熱禱會は、八月三十日から始められ、九月五日結願となつた。」(大乘) (禪)

龜川教信「緣起の研究」は、「今やこの國土に受容長養され來つた佛教を、歴史的現實なる今のわれらによつて、學行されるとすれば、それは最早や印度在來の佛教でもなく、支那に榮えし佛教でもない。それは紛れもなく、『皇國佛教』として特色づけられておる、日本佛教でなければならぬ。歴史的現實に立てるわれらにあつては、佛教からその國家的生態を奪い去るならば、これを佛教として學行すべき意義の大半を、喪失せしめられるというべきであろう……生きた緣起の歴史的現實の視野に立つ把握……佛教緣起思想の國家的役割を探り、日本主義と一枚なることを知ることこそ、或る意味に於て、本論攷の焦點」という信念からなされた大作であり、華嚴の事々無礙法界緣起の論理と、日本國體の論理、聖戰の倫理を、歴史的現實(田邊哲學)の概念を介して結びつけようとした勞作である。この年の第四回文化勲章受章者高楠順次郎の華嚴思想とともに、一括して別に論評したい。

「念佛護國論」(眞宗學者)によれば、「明治天皇御製『千萬の神もひとつにまもらるゝ、青人草のしげりゆく世を』明治時代の屈指の勤王僧たる明如上人は、これを端的に『後の世は彌陀のちかいにまかせつつ、いのちをやすく君にささげよ』と詠じ註した。出征兵士への餞辭であり、法主が門末に與えしものなるが……『命をやすく

君にささげよ」とは……明治天皇が下し給ひし、日本國民の進むべき道を、皇國の臣民たる眞宗教徒が、實行具現するに際して、その推輓力、原動力たるべき、宗祖親鸞の垂範を體現し、その生活に拍車をかけるものに外ならぬ。(163頁)

「久遠の理想の完成が如來の大悲によつて約束されたこと、即ち眞宗念佛が君國への忠誠を基本とする皇民生活の推輓力となり、原動力となり、拍車となる(192頁)」「特筆すべきは陸軍機命名式(市川註、廣島縣某村、二機とも「本派本願寺」と命名)に當り、廣島師團長長谷川中將代讀の、東條兼攝陸軍大臣の感謝狀をして、『王法爲本の宗風の活現』

の辭句を以て、感歎せざるを得ざらしめた事實である。

ともにこれ眞宗念佛の護國の片鱗と謂つべく、敢て茲に特記して、念佛護國の的證の一に供せんとする所以である。(202頁)

九月。グアム、テニアンの日軍全滅。ビルマ・雲南國境の日軍全滅。フィリピン沖海戦。臺灣沖の海戦で日本の敗北決定的となる。臺灣に徴兵制。「この海戦(比島沖海戦)に参加した戦艦は、ウェストヴァージニア、メリーランド、テネシー、カリフォルニア及びペンシルヴァニアの諸艦であるが、これらの各艦は、一度ならず撃沈或は修理不能の損害を與えた、と日本側で發表されており、中には三度も右の發表を受けた戦艦がある。」「この海戦に

よつて、日本海軍は三日間に、船艦「武藏」「扶桑」「山城」、航空母艦「瑞鶴」「瑞鳳」「千代田」「千歲」、巡洋艦「鳥海」以下九隻、驅逐艦「秋月」以下八隻は沈み、その後十一月末までには更に戦艦「金剛」、航空母艦「神鷹」「信濃」、巡洋艦「那智」、驅逐艦「若月」以下數隻が撃沈されて、日本人の勝利への信頼を繋ぎとめているはずの連合艦隊は、ほとんど全滅した。しかも大本營發表では、これを比島沖の海戦と稱し、その大勝利を祝うため、日本政府は酒や煙草の特配を行つて、一億の國民を瞞着していた。」

大日本戰時宗教報國會結成、會長文部大臣橋田邦彦。

神・佛・基を一丸とし、「宗教常會運動」すなわち中央常會・地方常會・組常會・教團信徒常會運動を行うこと決定。ルーマニア休戦。フランス臨時政府首班ド・ゴール就任(リ)。戸坂潤、東京拘留所に下獄。

十月。兵役法施行規則改正、満十七才以上兵役編入。勤勞報國協力令實施。中野正剛自殺。(その反東條の陰謀が電話の盜聴と交詢社内の録音器によつて知られていた)米軍レイテ島上陸。神風特攻隊出撃始まる。「一機一艦」の合言葉であつたが命中率九パーセント、しかも致命的打撃を與えたもの皆無。ブルガリア休戦。獨ロンメル將軍、既述ヒトラー暗殺事件に連座のため、入院中自殺。

「西君は頭も緻密なり、人物も眞面目にて、私も尊敬していた人ではあるが、(皇道でもあの人ののは、まだ何物かが教えられる所もあつたが)どうも私もあの人の所説には感服できない。一場の夢物語りだ。モノロッグだ。」(西田あて) 西田「生命」(想)

十一月。サイパン基地のB 29による東京空襲始まる。大日本言論報國會、國民決戦綱領決定。尾崎秀實、ゾルゲ死刑。アメリカ大統領特使ハレー、延安で毛澤東と會談、國共五項目協約に調印、ハレー駐華アメリカ大使となる。大東亞文學者大會(京)の秋、劉連仁氏日本に連行(四五年七月脱走、五八年二月石狩の雪山中で發見。劉連仁事件。)(齋藤啊がやる由、何よりも快事と存じます。)(西田・岩波あて)

「大和の精神」(禪)はいう、「鏝湯冷處無し、という語がある。冷處があれば、それだけ國民にまだ私心の滅し切れないものがあることを示す……。また一滴水一滴凍という語がある。國民の總力もここまで強化しなければ、總力結集とはいわれぬ。」「敵愾心の昂揚と禪」(禪)はいう、「脚下を照顧しつつ、自己を究明し、大禪定中に天皇に歸一し奉り、一舉手一投足、唯今唯今に尊皇に生き、生活に具現するは、禪者の體當り本分に於て、隨處に主となる活禪なり。これを興禪護國の我が宗風と云う。

必勝の信念、戦力増強の基本となす。」「露刃劍の活用」(禪)によれば、「石平道人のいう『洒落佛法、ぬけがら禪は何にもなるまじきぞ。眼をすえ、齒をかみしめ、はたし眼になりて、群がる敵の中に躍り込み、敵の槍先に突立ちたる覺悟もて修行せよ』と……今は此の一心不乱、米鬼英魔の降伏へと、はたし眼になつて進み行く所に、國民の覺悟はあります。」「

十二月。B 29による東京大空襲つづく。陝甘寧邊區參議會において、毛澤東「一九四五年度の任務」を説き、反ファシスト闘争は明年大きな成果を収め、ヒトラーは打倒されると言う。ビルマに反ファシスト人民解放連盟成立、越南解放軍創設、ビルマ人民義勇軍抗日遊撃戦を展開。京都宗教報國會、講演「絕對歸一の心」(禪)によれば、神風特攻隊、萬葉隊等の至誠崇高なる行爲そのまゝが、不動明王であり神である。敵愾心とは、一般國民感情を刺戟して、敵を憎めと云ふことの様に考えられているが、かように解しては、聖戰の目的と相去ること遠いものがある。公の怒、神の怒こそが敵愾心でなければならぬ。大御心を奉戴し、大御心に歸一し奉り、あくまで敵を撃滅することが、敵愾心である、と。

「今の戦争で、敵も味方も、本當に自分等を動かして居るものを、知らずに熱狂し居るのではないでしようか。

この戦争の結果として生れる子供は、誰の子でもない、皆のびつくりするものではないでしようか。」(西田・高坂あて)

「場所的論理に於ての對應というのは、根柢的に逆對應ということなのだ。場所的論理に於ての對應ということとは、いつも逆對應ということではなければならない……。

世界と個と絶對の對立を、矛盾的自己同一的に包むものが佛、世界と自己とは佛の兩方面……」(西田・務台あて) 神話

哲學盛んとなる。反共・反切支丹の哲學者井上哲次郎歿。

汪兆銘、名古屋病院にて歿。竹内好「魯迅」。丸山眞男

「國民主義理論の形成」(國家學會雜誌、特集、近代日本の成立)。憲兵司令

部の資料によれば、この一年間に全國の憲兵隊があつた

「造言」六、二三三件、大阪六二五件、京都四六四

件、仙臺四一二件、東京三四七件など。

Radhakrishnan, India and China, Education, Politics

and War. J. Maritain, Christianity and Democracy.

W. Laski, Faith, Reason and Civilization. G. Marcel,

Homo Viator.

西田「哲學論文集、第五」。務台「場所的論理學」。鈴木「日本

的靈性」。和辻「アメリカの國民性・日本の臣道」。河野省三

「神道史の研究」。石川「東洋文化史百講」(三)。山内得立「ギ

リシアの哲學」(上)。金子武藏「ヘーゲルの國家觀」。難波田

春夫「經濟哲學」。

太平洋戦争勃發前後に發行されたと思われる、本派本

願寺・戰時教學指導本部による、「皇國宗教としての淨土

眞宗」という小冊子がある。特定の有資格者に限定頒布

されたもので、第一章、序論、第二章、立教の本義、第

三章、眞宗の護國性、第一節、眞宗の日本の性格、(一)願

力廻向―背私向公、(二)絶對歸依―自然隨順、(三)現生不退

―現實尊重、(四)還相攝化―七生報國、(五)轉惡成善―生成

淨化、(六)清淨眞實―明淨正直、(七)歡喜踊躍、(八)知恩報德

―皇恩感戴、(九)常行大悲―八紘爲宇、(十)忍終不悔―忍苦

精勵、(十一)在家止住―家族和合、(十二)王法爲本―忠孝兩全、

第二節、護國の實踐、第四章、皇道と眞宗、第一節、神

社と宗教、第二節、尊皇敬神と彌陀信仰、第三節、眞宗

の否定思想。附録、一、靖國と淨土、二、大麻について、

という構造のものであり、別と同じ戰時教學指導本部の

「死生觀」という小冊子がある。いろいろ問題點を含ん

でいるが、ここでは前者の序論を引くにとどめる。

「わが國の宗教は、皇國の道に則り、各立教の本義

にもとづき、國民を教化し、もつて皇運を扶翼し、皇國

無窮の發展に貢獻するを本旨とす」べきは勿論である。

わが淨土眞宗においても、その宗制には、第三條に「宗

祖見眞大師、佛說無量壽經に依り、七高祖の釋義を承け、

元仁元年、教行信證文類を造り、淨土の眞假を判じて淨

土眞宗を開き、信心正因稱名報恩の教義を大成し、王法爲本の宗風を顯揚す、是れ立教開宗の本源なり。」とあり、第五條に「本派の教義は教行信證の四法を立て、専ら佛號を聞信し念佛相續して、大悲を念報し、獲信の一念に攝取不捨の光益を蒙り、現生には正定聚不退の位に住して、國法を遵守し臣道を實踐し、以て人生の要務を完うし、當來には必ず淨土に往生して、滅度を證し、往還の二利を満足するに在り」とあり、第六條には「特に皇恩の辱きを感戴し、皇謨翼贊の重任を荷負し、敬神崇祖、報本反始の誠意を抽すべきこと」と規定せられてゐる。よつてこれより眞宗立教の本義を述べ、それに則る皇國宗教としての眞宗の面目を明かにしようと思う。」

一九四五(二〇)。一月。本土都市連續空襲始まる。十四日伊勢豐受大神宮爆撃。焼け残つていたわが校動員學徒の名古屋市解脱寺寮、至近彈により傾斜甚だしいため神戸製鋼青年學校寮に移轉。大本營本土作戰計畫決定。松根油ヒマ油増産促進、各戸の空地にヒマ栽培。文部省による大日本教化報國會議。「アララギ」休刊。林房雄「神機到るの年」(東京新聞) 佛教界、教育界に「必勝の信念」の強調始まる。「此ノ戦争ニ敗レ、米軍ガ本土ニ上陸スレバ、慘虐ナ事ヲスル。其ノ時俺ハ通譯ニデモナツテ、命

丈ハ助ケテ貰オウ。」(東京都、無職、S・H、四三)「敵ガ上陸シタラ、國旗ヲ出シテ歡迎スル。」(自昭和十九年九月下旬至二十年五月上旬、大分縣農業、O・N、四九)「連軍ワルシヤワ占領。ハンガリア、連合軍と休戰協定調印。」

神宮皇學館大學學長山田孝雄「全日本が神都たれ」にいう、「眞の日本人の道は、神ながらの大道であり、眞の神道は伊勢の神宮を中心としたものでなければならぬ。従つてこの地が神都であることはいうまでもないが、さらに進んで、全日本が神都となり、神慮を仰いで何事でもなすようにならねばならぬ」京都帝大小牧實繁教授の、宗教は「上御一人に歸一し奉る」ことと矛盾するゆえに、宗教を現人神に奉還せよ、の主張に對する反論(石田專曉)同志社大學神學科の始業式に、日本基督教團、遠藤作衡牧師挨拶「日本基督教神學の展開に、深い意義をもつ同志社神學科が、眞に國家の要請に目ざめて立つために、斷じて行ふべきことは、日本歴史を貫ぬく佛教の權威と、日本學の權威を、他に求めず他に仰がず、自らの中に包藏しうる、との一大希望と確信を以て進出すべきであり、この内容ある神學科においてこそ、將來大東亞建設に、精神的特攻隊として挺身しうる人物を、養成することが出来る。」「田邊君は私の論理は天上の論理だというそう

です。私の論理こそ現實の論理と思うのに。」(西田、西谷あて)
 「場所的論理に於ては、逆對應ということが考えられます。佛に對象的に對するものではありません……私と汝と相話するのも、逆對應です。」(西田、務あて)。

二月。米・英・ソ「ヤルタ會談」、戦争の最終處理を協議、ソ連の對日參戰協定。パリに全世界勞働組合連盟本部設置。反ナチのクリスト者K・F・ゲルデラー(元ライプス市)拷問により獄死。米軍硫黃島上陸。東京大空襲。艦載機、機動部隊の本土空襲始まる。國內學校授業停止、生産面への動員實施。京都市青年教育課長折井氏談話發表、「動員學徒の指導に當る教員が、學科の教師にすぎず、綜合的能力を欠くために……學徒動員が學徒の品位を守る事ができず。學徒の工員化が問題となつてくる。學徒の工員化でなく、工員の學徒化にこそ學徒動員の一面の使命がある。」「百年戦争の覺悟を固めよ」(中外日)。「寺院を工場に・工場僧を送れ」(同紙)は、二月二日、東西本願寺協力、二千萬人運動の戰時宗教強化運動中央常會における、軍需省監理部長長谷治良中將の提案をのせている、「第一、寺院を工場として頂きたい。寺院を中心にあらゆる精神的結合力を協せて、お寺を戦力増強の簡易な工場としてはしい。檀信徒老若男女をとわず協力して、御本尊様の前で、お經を讀みながら戦争の増強に

つくしたら、非常に大きな力となると思う。これこそ物心一如の戦力増強運動であり、御協力を頂きたい。第二、軍隊に従軍僧がある如く、工場に僧侶が入り「工場僧」を作つて、工員全部の精神教化に盡してほしい。第三、寺院の金屬類を卒先して供出してほしい。金屬製の佛様である場合は、その御本尊御自身御出征なさるよう、是非協力して頂きたい。」「貴院における「天佑」問答」(同紙)にいう、「天佑ヲ信ズルモノ天譴ヲ恐レル」、去月末貴院本會議において試みられた這箇の質問は、國民の幾たびとなく心に緊めて、牢記すべきところと信ずる。右の質問において、議員姉崎正治氏は「政府は從來の政策において、天佑を宣布し、喜びはこれを傳え、憂いはこれを蔽うたことがなかつたか」と問ひ、さらに「政府は天佑觀念をもつて満足していなかつたか。天佑宣布に當つて、浮華輕佻あるいは虚偽に近いものがなかつたか。」「ときわどいところを衝いたが、小磯首相はこれに對し、「いやわれわれは天譴に直面してゐると存ずる。今日までわれわれがこの境地にあることを認識せずにはいた現實を反省して、嚴肅な眞摯な信念に立還らねばならぬ……吾人は貴殿において、この質問吟味のなされたことを頗る多とするものである……」。」「比叡山延曆寺、座主導師のもとに滅敵祈願會、全國から參集の僧侶による

「不斷經」の熱禱。

近衛文麿、戦争終結方途を上奏、「敗戦は遺憾ながら最早必至なりと存候：敗戦は我國體の瑕瑾たるべきも、英米の輿論は今までのところ國體の變更とまでは進み居らず：隨て敗戦だけならば國體はさまで憂うる要なしと存候。國體護持の立前より最も憂うべきは、敗戦よりも敗戦に伴うて起ることあるべき、共產革命に候……これら軍部一味の革新論の狙いは、必ずしも共產革命に非ずとするも、これを取巻く一部官僚及び民間有志（之を右翼というも可、左翼というも可なり、所謂右翼は、國體の衣を着けたる共產主義者なり）……從て戦争を終結せんとすれば、先ずその前提として、此の一味の一掃が肝要に御座候……非常の御勇斷をこそ望ましく奉存候。」^(四)「死ヌ事ニ決ツテ居ル飛行兵ニ志願スルモノハ馬鹿ダ。」^(五)（埼玉縣、無職M・I子、憲兵檢舉取調べタルニ、）。「戦争ハ負け改悛の情願者ナルヲ以テ、始末書を徴シ放遣。」^(六)「戦争ハ負けテモ吾々百姓ニハ影響ガナイ。」^(七)（埼玉縣農業O、）。「皇帝ヤ政府ノ首腦者連中ハ處分サレルダロウガ、平民階級ニハ心配ガナイ。悪ク行ツテモ、満州ニ島流シデス。」^(八)（東京、工員K、）。「戦争ニ負けタトコロデ、親方ガ代ル丈デ、吾々ノ様ナ税金ノ道具ノ様ナモノハ、何ノ關係モナイ。」^(九)（犯人、三月。東京大空襲。「夜間大空襲で殺されたもののみで一〇萬人をこえた。道路という道路をふさぎ、すみだ

川をいつぱいにしたあの焼死體を見た人は、それを永久にわすれることができない。」^(一〇)（現代日本） 幼児集團疎開始まる。硫黄島失陷。三木清檢舉。市川正一獄死。インド、イラン對日宣戰。カイロにアラブ連盟結成。ユーゴ・チトー政權樹立。西本願寺、軍用機六臺獻納（計二十二臺、一八四萬圓）。海軍機「黄槩」號（七萬圓）獻納。「中外日報」紙、工務員不足のため時々休刊、三月二十日附紙裏面 $\frac{1}{2}$ 白紙のまま發刊。西本願寺、僧侶動員に關する「僧侶招集規程」發布。「私は即非の般若的立場から、人というものの、即ち人格を出したいとおもうのです。そしてそれを現實の歴史的世界と結合したいと思うのです。」^(一一)

（西田、鈴木あて）

四月。宮城、大宮御所、赤坂離宮、明治神宮爆撃をうけ、神宮焼失。米軍沖繩本島上陸。小磯内閣總辭職、鈴木貫太郎内閣成立。「アンナニ東京ヲ焼イテ了ツテ、天皇陛下モ糞モナイ、戦ニ勝ツカラ我慢シロト言ヤガツテ、百姓ハトツタ米モ自由ニナラヌ、骨ガ折レル丈ダ。」^(一二)（埼玉縣農業H・A、）。「毎日供出供出、俺ラナンカ天皇陛下ガ死ンダラ丁度ヨイ、ト思ツテル。」^(一三)（犯人）「我々ガロクニ食フコトノ出来ナイノハ戦争ヲシテ居ル爲ダ……ミンナ天皇陛下ガヤラシテ居ルカラ悪イノデアル。」^(一四)（四月、函館市、無職T・N）「私共はどうかして我國の國體、我國の文化の

上に世界的意義を見出し、新しい日本を、その上に打ち立てて行く様、努力せねばならぬのではないでしようか。」(西田、久)
(松あて)

ソ連軍ベルリン突入。牧師ボンヘーファー絞首刑。⁽²⁴⁾ ヒトラー自殺(一八八九)。ムッソリーニ銃殺(一八八三)。ドイツ無條件降伏。日本政府戦争完遂聲明。サンフランシスコ會議、國連憲章成立。ソ連、日ソ不可侵條約不延長通告。中共第七全大會、毛澤東を主席とする新中央委員會を選出、毛「連合政府論」、朱德「解放區の戰場について」、野坂參三「民主的日本の建設」報告。劉少奇(一八九八)中央委員、黨規約改正について報告。周恩來、中央委員、政治局委員、書記局書記を兼任、彭德懷(一九〇〇)中央委員となる。

五月。最高會議構成員會議、和平方針を協議、ソ連に終戰調停依頼方策。東京大空襲、宮城、大宮御所各所炎上。ボルネオ、「死の行進」山口聯隊區司令官來島の強要により、山口縣内政部長、管下各市町村長あて「靖國神社祭祀の節にない、國禮國式を以て葬送可相成決定候條」通達。大日本戰時宗教報國會佛教局、「日本佛教徒の誓い」を全國に通達(三月二十六日決定のもの、起草委員長、前東洋大學學長高嶋米峯)。

「一、神勅ヲ奉戴シ、勇猛精進、皇運ヲ無窮ニ扶翼セム。

一、和合ヲ尊重シ、背私向公、臣道ヲ如實ニ、躬行セム。
一、三寶ヲ篤敬シ、不惜身命、慈恩ヲ至心ニ、報謝セム。
一、正法ヲ護持シ、折伏攝受、道義ヲ世界ニ、顯揚セム。
一、生死ヲ超越シ、踊躍歡喜、國土ヲ久遠ニ、嚴淨セム。」
日本基督教團東京支教區では、滿六十五才以下の男子正・補教師、滿四十五才以下の女子正・補教師及び支教區内各教會信徒有志六十六才以上の男子教師の志願者を以て、東京國民義勇隊を組織することになり、都直屬の團體として、六月三十日本郷教會において結團式の豫定。

東本願寺、六月教化大攻勢のプログラム決定、教區防衛増産態勢の強化擴充、特命布教使派遣、教學局出仕、教化研究所指導員等總動員巡回、必勝御文披露式、必勝名號頒布。

「特政精神の根源」によれば、「我々は、宗教の超世俗的永遠性と、超有限的絕對性とを主張せんがために、國家の歴史的現實を無視することは出来ない。何となれば、國家の歴史的現實は、我々の依つて立つべき基盤であり、生命の根源であるからである。現代の宗教の基本的課題は、宗教を宗教として飽くまで深くその本質的生命を生かしつつ、しかもそれを現實から遊離した、普遍的信仰として抽象化することなく、國家的現實と密接に結合する、國民的宗教として具體化するところにある。倫理的

實體としての國家と宗教とは、その深き根柢に於て、當然結合しなければならぬ。……日本の文化性格は理事一如、否、事々無礙に存するといひ得るであらう。即ち我を空しうして、物となつて見、自ら事の中に没して、それと一になつたのである……無の心境に達した我々は、萬境に應じて聊かも凝滞するところなく、眞に日本的行を現成するのみである。否定即肯定を説く大乘佛教の根本精神もまたこの外に存するのではない。盤珪の不生禪が説く心境も自ら味得されるではないか。予はこの心境を禪的に表現して如々不動禪と名づける。『聖人已なし、己ならざるなし』といえる僧肇の言、亦味うべきである。特攻精神の根源は、個我の否定によつて、ともに歴史を擔う魂の復活に存する。この心の轉換を、禪は古來大悟徹底と呼んだのである。」「決戰教學の本義―特に眞宗教學に就て」によれば、「……聖人はこれについて『本願を宗とし、名號を體となす』と論ぜられ、本願名號を説ける教なりと見られた。恰もこれ日本教學に於て、皇道に相當するものである。皇道が日本民族の徳の本であり、神ながらの大道であるに比すれば、本願名號は十方衆生に證悟せしむる、佛の本誓に基づく善本であり徳本である。……眞宗への道が、いかに深き内面性に於て、皇道への道に連なり……眞宗教學することが、自ら日本教

學の本義に契當すること……眞宗教學の開顯が、日本教學の昂揚伸展に眞に役立つ……特に決戰下に於て、その教學の示唆と指導とを俟ちて、眞に力強き立ち上りと伸展とを、期し得る……。」白柳秀湖「皇國必勝の道」(毎日)芳賀禮「古代の桶もて彼の屍を擔へ―ヒ總統を悼む」(讀賣)野坂參三「民主日本の建設」(述)は、戰犯處罰、民主政治實現、政治機構としての天皇制と、半宗教的天皇を區別し、前者は即時廢止、後者は人民投票による、重要産業の國有化による工業の高度化、農地改革と農業の機械化、帝國主義的國外市場を廢止、國內市場の開發、以上の政策實現のための民主的諸政黨による「連合政府」の樹立を説き、アメリカ帝國主義による日本植民地化の意圖に對して、國民的抵抗組織を作る必要を説く。

「猶太人がバビロンの捕囚の時代に、世界宗教的發展の方の基礎を作つた。眞の宗教的民族は斯くなければならぬ。民族の自信を唯武力と結合する民族は、民族的武力と共に亡びる。」(西田、鈴)これは鈴木博士「日本の靈性」(木あて)の著作意圖に通ずると思われる。「ヒットラーも悲惨な末後を遂げた。無理が通れば、道理が引込むという諺もあるが、無理はやはり遂には通らぬものらしい。」(同上)天龍寺に於て、臨濟宗宗務廳主催、敵國降伏大祈禱會、導師關管長、各山貫主教師出仕。(自廿三日至廿七日)西本願寺大谷光照法主、つぎの皇國護持の

「御消息」を發し、一千萬門徒に六字の名號を汚す勿れと示す。

「……宗祖聖人に朝家の御ため、念佛まうすべきよし御教訓あり、中興上人に王法爲本の御勸化あり、されば眞宗念佛の行者、かかる皇國の一大事に際しては、宜しく眼中に一身なく、腦裡に一家なく、己を忘れ家を捨て、ひたすら念佛護國の大道を邁進すべきなり……。信は力なり、一切の有碍にさわりなし。祖師聖人はかねて念佛者は無礙の一道なりとも示したまい……。念佛の不行は千苦に耐え萬難に克つ。國難何んぞ破碎し得ざることあらむや。遺弟、今こそ金剛の信力を發揮して、念佛の聲高らかに、各々その職域に挺身し、あくまで驕敵擊滅に突進すべし……。かえすがえすもおくれをとって、六字のみ名をけがすことなからむよう、切に望むところに候なり。」西本願寺つぎの綱領決定。

宗門決戰綱領

國難を救うものは三寶なり。祖訓の本領偏に奉公に歸す。今ぞ其の念佛を捧げて、皇國を護持すべきなり。一、住職は教團の支隊長なり。其の統理する寺院機能を、戦力補給の一途に結集し、寺族を手兵として、隨處に不請の友愛を傾け、以て門徒の教化に任じ、在郷の法將として、敢然戦列に先驅すべし。一、坊守は一郷の法母なり。

常に冥見を仰いで、寺庭に道義生活の範を示し、衣食足らずとも禮節をあやまらず、慈光の下毅然として、皇國婦道の堅壘を死守すべし。念佛者に生死なく退轉なし。猊下は一千萬の陣頭に在り、即時布達の任務に就きて、必勝の念佛朗々と、其の身、其の命、其の財を盡して、以て御信倚に奉答すべし。

六月。國內戰場化具體措置決定。國民義勇兵法公布。文部省、全宗教團體あて「寇敵擊攘戰勝祈願祭典法要執行の件」通牒。大政翼贊會、興亞總本部、大日本婦人會、大日本青少年團、何れも解散。米大統領トルーマン、日本に原爆投下勸告を採擇。それは軍事目標および民間住宅地の兩方を含むものと計畫された。科學者顧問團の勸告、「一、原子爆彈は、出來得る限り早く、日本に對して使用さるべきである。二、原子爆彈は二重目標 a dual target すなわち、家屋に圍繞され又は接近せる軍事施設ないし軍需工場、ならびに最も破壊を受け易い、他の建築物に對して使用さるべきである。三、原子爆彈は、この兵器の特質について、豫め警告を與えることなく、使用さるべきである。」ネール投獄。ネール、ガンジーと共にインド總督と國民會議派との交渉に入る。西田幾多郎歿(洞然院明道寸心居士)。「哲學論文集第六」刊。「眞言宗神護隊」結成。眞宗十派聯合の論壇「……身を挺し

て國民の精神教化に従い、念佛護國の宗風を發揚して、思想・戰に完勝して、無窮の皇運を扶翼し奉らむことを。」天台宗管長教諭「……佛祖の照鑑上に在り、宗徒一般頗るく納と共に直ちに蹶起して、自省自誠、己を空しくし、道義の振作と戰意の昂揚を圖らんがための、教化の徹底・滲透に挺身し……」。佐藤通次「日本は必ず勝つ」(中外・日報)。「新らしいものから漸次になくなつて行く。最も古いものが後に残る。従つて國として最も後まで残るのは、わが日本という國家である、と斯様な結論は出ないものでしょうか……伊先ず獨次で滅ぶ、何か淋しく感ぜられましたが、最後に残つた日本となつて、愈々信念が固まつたわけにあります。一億一心の實は、これから昂揚せられるでしょう……以上淋しさの餘り、爾來只心の友であつた貴老臺に、訴えて見たいので、斯くは。」(紀平正美、眞溪淚骨あて)

沖繩失陷。沖繩女子師範學校生徒および沖繩第一高女の二千名(十六才―二〇才位)、絶望的な戰鬪に参加して散る。「沖繩の悲劇―姫百合の塔をめぐる人々の手記」は、つぎのように語る。

「午後になつて、いよいよ銃の音も頻繁になつて、皆の不安は一層ました。私達は、岩にピッタリよりそつていた。その時、ふと一枚の紙片が廻されてきた。今晩海に入りて自決せん」。

私達は顔を見合せた。どうする? 紙片をもつたまま、皆ため息をついてだまつてしまつた。もう少し待つてみたら、皆の目がうなづいたので、私達は紙片のうらに、時期未だ至らずと書いて廻した。君達は期至らずというけれど、人間は一度死ぬ機会を逸したら、なかなか死ぬるものではないよ。生きてさえおれば、死ぬ機会はずっとあると思います。このジャングルだつて、今に焼かれてしまうのだ、そして僕達も一緒に、まさかそんな、十米と離れない目の前の海には、青い波がうねつていた。私一個(もはや團體の中の一つではなかつた)の自決が、どれだけの意味を有つのだろうか。一少女の自決、それは美しい話に違いない。しかし、美しい話のみが眞理であろうか。次から次へと浮かんでくる想念に、頭の中がわれる様にいたくなつた。皆顔を見合はすだけに、沈黙はつづいた……夕方近くなつて、やがて私達は救急カバンを整理することにした。先生の發言で、寫眞、手帳その他の書類を、悉く一字も讀めなくなるまで、細くちぎつた。……私達は決心のつかぬまま、死ぬ用意をしていたのだつた……刻一刻おしよせてくる逼迫感に、私達は再び自決について話し合つた。師範の生徒は絶対に捕虜になつてはいけな、自決だ。私達は結局、どうにもならない最後の時には、深く立派に死ぬことを約して、時期を待つことにした。海に入つても泳ぐ自信のない私は、隣の岩の中にいる中尉に、日本刀で切つてくれるように依頼した、時期が來たら、と快く引受けてはくれたが、八人だと云うと、そんなに多勢はとても駄目だ、と斷られた。死ぬ時は皆一緒に

なければいまだ、との皆の意見であつたので」(園子)

七月。ポツダム宣言發表。ニュー・メキシコ原爆第一

號實驗。主食配給一割減決定(二合)。「此ノ様ニ戦争ガ

長ク續イテハ、非常ニ困ル。一層負ケルヲナラ、早ク負

ケタ方ガ良イ。負ケテ米英ノ支配下ニ下ツタ方ガ、幸福

ダ。ソウナレバ何モコンナ不自由ヲシナクトモヨイ。」

(三)重縣(重縣)「毎年四月には、誇らしげな新入生を

迎える國立も、この年は既に戦局が絶望的となつた七月

二日に、漸く、よれよれの國防服に戦闘帽姿の、異様な

る學生を迎えたのである。この新入生も直ちに動員に驅

り出される。一方には教授學生の入營召集相つた。昨

日の送る身は、今日直ちに往く身となり、明日は又逝く

身にもなりかねなかつた」(一橋専門部教員養成所史) 秋田縣花岡に

おける中國人虐待事件(六八三〇名死亡、失明二七七名、

肢指欠損等一六二名―外務省報告)。

八月。八月一日戰時宗教報國會佛教局、大東亞佛教青年會等「日本佛教徒大東亞宣言」發表。曹洞宗九月五日

の臨時宗會に「曹洞宗雲水挺身隊」結成を内定。廣島

(日六)長崎(日九)に原爆投下(死者廣島二四萬、廣島におい

て、移動演劇隊丸山定夫ら九名爆死。「廣島と長崎とに、

原子爆彈を急遽投下したことは、その政治的目的がすべて

完全に達成されたという意味では、決定的な成功であ

つた。アメリカの日本管理は完璧であり、ロシアとの權

限争いは全く存在しない……原子爆彈の投下は、第二次

大戰の最後の軍事的行動であつたというよりも、寧ろ目

下進行しつつあるロシアとの冷たい外交戦争の最初の大

作戦の一つであつた」(ソ連對日宣戰(日八)。戸坂潤獄死。

(日九)八月十日陸軍大臣、全軍將兵に、楠公の「七生報國」

時宗の「莫煩惱、驀直進前」の精神を以て、「たとえ草

を喰み、土を喰り、野に伏すとも斷じて戰う」ことによ

つて死中に活を見出せと、布告。ポツダム宣言受諾(日十四)

第二次大戰終る。天皇の終戰詔書「朕ハ茲ニ國體ヲ護持

シ得テ、忠良ナル爾臣民ノ赤誠ニ信倚シ、常ニ爾臣民ト

共ニ在リ……宜シク舉國一家……確ク神州ノ不滅ヲ信シ

……誓ツテ國體ノ精華ヲ發揚シ……爾臣民其レ克ク朕カ

意ヲ體セヨ」日本の降伏を遅らせたものは、天皇制が維

持できるかどうかの問題であり、降伏後、政府當局、陸

海軍、情報局がこぞつて強調したことは、ただ一つ「國體

の護持」であつた(當時の各聲)。八月十五日皇居前廣場

の情景「二重橋前に赤子の群、立上る日本民族、苦難突

破の民草の聲……土下座して……天皇陛下お許し下さ

い、天皇陛下!とすすり泣き……群集の中から歌聲が

流れはじめた。『海ゆかば』の歌である。一人が歌い始

めると、すべての者が泣きじやくりながらこれに唱和し

た、大君の邊にこそ死なめかえりみはせじ……またちがつた歌聲が右の方から起つた。「君が代」である。

土下座の群集は立ち去ろうとしなかつた。歌つては泣き、泣いてはまた歌つた。……大御心を奉戴し苦難の生活に突進せんとする民草の聲である。日本民族は敗れはしなかつた。」(新聞) 寮舎の疊の上で、「玉音」放送をきいた、われわれ名古屋班の動員學徒は、わたくしを含めて八名であつたかと思う。部・課長以下、工場の構内を

ゆききする人達の多くが、口を半ばあけているのが、印象的であつた。かねて學徒諸君から、戦争の結末をたずねられて、わたくしが答えたのは、「明治維新の世界史的批判というかたちで終るだろう。」というえたいのしれぬ豫言であつたが、これはあたつたようでもあり、あたぬようでもある。文部省訓令にいう「……これひとえにわれらに匪窮の誠足らず、報國の力乏しくして、皇國教學の神髓を發揚するにいまだしきものありしによることを反省し、この痛恨を心肝に刻み、眞摯なる責務の完遂を今後に誓わざるべからず……。」(八月十五日附地) (方長官學校長宛)

聖旨奉體方ニ關スル件 (昭和二十年八月十五日訓令)

今回 詔書換發セラレタルニ付、文部省令第五號ヲ以テ、聖旨ヲ奉體シテ、戦後ニ處スベキ方途ヲ諭示スル所アリ、管長及教團統理者ハ、宜シク所屬教師及教壇信徒

ヲ教導シ、相共ニ恐懼慚愧、忍苦精進以テ深遠ナル教慮ニ對ヘ奉ラムコトヲ期スベシ

昭和二十年八月十五日 文部大臣 太田耕造

(イ) 日本再建宗教教化實踐要綱

一、趣旨

我が國未曾有ノ悲局ヲ克服シ、光明日本ヲ建設シテ、世界平和ノ確立ニ寄與センガ爲ニハ、國民悉ク敗戦ノ由ツテ來ル所ヲ深く反省シ懺悔スルト共ニ、戦争終結ノ大詔ノ聖旨ヲ奉體シテ、愈々道義ニ徹シ、忍苦精進以テ國運ヲ荊棘ノ裡ニ打開セザルベカラズ。而シテ之ガ爲ニハ、宗教教化ノ力ニ俟ツ所極メテ大ナルモノアルヲ以テ、一層其ノ生新活潑ナル活動ノ展開ヲ圖ラントス。

二、教化目標

宗教教化ノ實踐ニ當リテハ、特ニ左ノ事項ノ徹底ニ力ム

- (一) 承諾必謹ノ態度ヲ堅持シ、國體護持ノ信念ニ確住スルコト
- (二) 信義ヲ篤クシ敬愛ヲ旨トシ舉國一致、萬邦諧和ノ實ヲ擧グルコト
- (三) 報恩感謝ノ念ヲ深メテ、忍苦耐乏以テ各自ノ本分ニ最善ヲ竭スコト
- 三、實施要領 (省略)

四、實施上留意スベキ事項 (略) (省)

(四) 宗教常會運営要項

一、趣旨 (略) (省)

二、方針 (一) 本運動ハ左ノ目標ヲ設定シ、國民ノ宗教的信念、情操ノ啓培ニ依リ、之ガ滲透具現ヲ圖ルモノトス (目標(1)(2)(3)は前記教化目録(一)(二)(三)に同じ。市川註)

(二) 本運動ノ目的ヲ達成スル爲中央常會、地方常會、組常會、教壇信徒常會等ヲ開催スル (以下省略)

東久邇首相「一億總懺悔」提唱。終戰連絡事務局設置。

連合軍最高司令官マッカーサー厚木到着。島根縣廳焼打事件。島木健作歿。「八月二三日には警察力の擴充強化

の方針を決定した。ぼう大な臨時軍事費がばらまかれた。

その額は八月中に九七億圓、九月中に四六億圓に達し、まだ納入されない軍需品の補償費まで支拂われて、獨占

資本家の懐にころげこませた。他方軍需工場はただちに

大量首きりをおこない、離職者四百萬、軍隊からの復員者をあわせて一千萬の失業者が、インフレの急速にすす

む巷にあふれ出た。」(昭和)

中ソ友好同盟條約成立。インドネシア獨立宣言。イン

ドシナ、バオダイ退位。ホー・チーミン(胡志)の下に、

ヴェトナム人民代表者會議、民族開放委員會結成(九月、

ナム民主共和國)。京城に朝鮮建國準備委員會成立、委員

長呂運亨。各地に人民委員會組織。終戰前、中共指導下の正規軍九十一萬、民兵二百二十萬、中共黨員百二十萬餘に達していた。八月二十五日、中共「現在の時局に對する宣言」發表、平和と民主的團結への希望を表明、毛澤東重慶に蔣介石と協議、中國政治協商會議の招集を決定。

「特攻隊精神」

(近江神宮々々、前神宮皇學館長平田貫一)

はいう、「我等祖先が國家危急の秋に際して、國體への大なる反省に基き、

全力を傾注して光輝ある運命を打開せると同じく、今日に於ても此國體への反省の下に、たとえ全國民穴居の生

活を爲しても、頑張りぬかねばならない。」(八月一日)「天佑神助に敬虔の心を持て」(德富蘇峰)はいう、「必ず勝つとい

うことは確信しているが、勝つには道を盡さなければならぬ……あくまで必勝の信念を持つて、本當にお上を推

戴して、お上の錦の御旗の下でやるということであれば、まける氣遣いはない。物量々々と言うが、アメリカもも

う物量の底はついてゐる。……神風などは頼りにすべきものではないと言ふことは、非常なる物質論の最惡なる

ものと、私は思つて居る。これは日本の傳統的精神に全く反するものである。お勅語に、皇祖皇宗ノ神靈上ニア

リ」と仰せられてあるのも、その意味でお出しになられたものと拜察する。」(八月三日)

東本願寺教化部、八月戰時

訓は「一、迷う勿れ、皇軍は必勝す、襲敵何事かあらん。一、苦む勿れ、草を食べ野に臥するも、護國の勤めは樂し。一、惱む勿れ、本願名號を信すべし。」「全軍將兵に告ぐ」はいう、「……斷乎神州護持の精神を戦ひ拔かんのみ、假令草を喰み土を嚙り野に伏するとも、斷じて戦うところ死中自ら活あるを信ず。是れ即ち……時宗の『莫妄想』『葛直進前』を以て醜敵を撃滅せる闢魂なり……」(八月十日 陸軍大臣)。「一億國民に告ぐ」はいう「……今や最惡の狀態にたち至つた事を認めざるを得ない。正しく國體を護持し、民族の名譽を保持せんとする最後の一線を守るため、政府は固より最善の努力を爲しつつあるが、一億國民にありても、國體の護持のために、あらゆる困難を克服して行くことを期待する。」(同日、情 報局總裁) 大日本戰時宗教報國會「日本佛教徒大東亞宣言」發表。「曹洞宗挺身雲水隊」結成。

「必勝不敗の要訣」はいう。「世界史の下せる最後の審判に堪えて、歴史の舞臺に永くその地位を保ち、更に益々生成發展の道を辿り得る國家乃至民族は、國體の尊嚴に透徹し、愈々超個の體驗に生き、明く淨く直きまことの道義的生命力を、持つものでなければならぬ。……今次の大戰は我必らず勝つ。神は道あるものに加擔する。必勝不敗は必然であるが、それを的確にして神速な

らしむる要訣果して如何。人間實存の根據たる眞の實在は、一面大いなる統一性を保持するとともに、他面強き分化性を具有する……人間の主體的基底は、民族としての種以外の何物でもない。……種が類に媒介されることは、同時に類が種に媒介されることでなければならぬ。ここに普遍を宿す特殊としての日本國家の建設がある。それは神から生れない民族の絕對性を主張する民族主義でもなく、民族を生まない神の超越性を唱道する世界主義でもない。ここに日本の世界觀の強靱なる特質が存するのである。我々の主體的生命は、祖先をその實在根據とする。而して祖先は、大御親をその根源として、初めて存在を全うし得るのである。されば個的生命體の身心は、唯一絕對者たる大御親より與えたまうところである。……主従一體であり父子は一如であるから、その關係は法爾自然である。子として奉仕の至誠を致すは、本然の情である。そこにはただ奉謝の感激があるのみである……その感激は自己のよくするところでなく、大君の恵みによつて與えられたものである。かかる感激に於て主客は一體となり……臣子が大君の醜の御楯となつて純忠を致すは、恵み與えられたる生命の本源に還ることであつて、人生無上の喜びでなければならぬ。これ一に萬邦に比類なき我が國體の然らしむるところである。國體は

君臣の關係が現實に具體化する形體に外ならない。思うに國家の本質は統一性に存する。しかも超越即內在の具現は、獨り一君萬民の國のみである。……國家自體が道義の具現せるものであり、しかも國家が道義の實現を期する限り、その果遂せんとする戦争は、所謂聖戰であつて、必勝不敗である。その必勝不敗の信念は、神國日本の世界に冠絶する國體と、光輝ある歴史に淵源する。道の國日の本のみは萬づ代に、續き續きてたゆむ時なし。

(八月十
四日)

……歐米人は「我如何に生くべきか」を問題とするに反し、日本人は「我如何に死すべきか」を前提とする……然し人間は他面自覺的存在であるから、必然的な死を超えて、死中生を得、死裡に無礙自在たらしとする切なる要求を持つ。死を避けんとするは、決して怯懦の故ではなく、死を克服することによつて、殉國敢闘の時を待たんがために外ならない。……教官の實談によれば、教育の一年目に少年航空兵は喜んで祖國に獻身せんと意欲に燃え、更に一年半を経過すれば、敵を斃すまで死んではならない、という精神が湧き出づるとのことである。その深き心境は、人生の大半を精神の鍊成に費して、漸く悟り得た高僧の信念にも、匹敵し得ると思

う……」(八月十五日。敗戦によりこの論說中斷。)

(上記日附入の諸説何れも中外日報紙所載。)

「中外日報」主筆眞溪淚骨「編集日誌」はいう「嗚呼

終に畏多くも四國共同宣言受諾の大詔渙發を拜するの日は來た、正に之れ言亡慮絶の一關、我等は語らんとするも感想出でず、泣くに涙なく、訴うるに處なく、我等は唯だ黙々として端坐、腸九回の熱涙を絞るのみ。此上は我等臣子の分として、専ら言行を慎み、大詔必謹の臣節に終始し、苟も輕舉妄動する事なく、専ら皇國護持の一念に、新しき巨歩を刻むべきのみ。

(十六日)

「學習院教授紀平正美はいう「いかにお詫び申上げて、その罪は消えることではないが、われわれは天皇陛下に對し奉り、

心よりお詫びを申上げねばならぬ……この「和」の力が幾多の國難を突破する原動力ともなつてきたが……餘りにも「個」を主張する人々のために、ついに事態は最惡のところに来た……いまこそ「和」の精神をもつて、自重に自重を重ね……國體護持に邁進すべきである。」元文相橋田邦彦はいう、「わが國體の尊嚴なることは、神勅の示し給える如く天壤無窮であつて、君臣一致、萬世一系は國の元首にましまし、蒼生はその赤子であることは日月のごとく炳として明らかである……今こそ大詔を謹しみ畏み、これを必ず履み行ふことが、國體の護持である。」(八月十)この正法眼藏學者は、のち戰犯として連行を求められ、出頭間際に服毒自殺。文部大臣太田耕造「國體護持に徹せよ」の文部省訓令を發した。

(八月十
五日)

淨土宗總本山知恩院、「一向に念佛すべし」の人心安定運動開始。天台宗「國體護持大祈願」嚴修。新法相岩田宙造、記者團會見、「秩序と正義」について、國體護持、治安維持のため、檢察力強化の必要を力説。東久邇首相、「斷乎死力を盡し、國體護持を誓う」放送。宇治山田市長齋藤眞澄「皇祖の神鎮り給う伊勢の神都も、戰災を蒙つたが、この試験に勇氣百倍、國體護持の中樞として、速かに復興せねばならぬ。」眞言宗十大總本山「國體護持祈願會」。金光教本部、全國に「國體護持」の祈念をなすよう示達。臨濟宗務總長足山道源「眞に國體護持上には、恩讐を越えて、堅實なる國民思想、國民信念の保持のために、今後肚を練らねばならぬ。」法華宗佛立講、國體護持大運動開始決定。天理教管長中山正善諭達「……聖斷今や嚴として下る。我等釋然悲痛憤激の情懷を超え、一意聖旨を畏みて、承詔必謹の至誠を捧げ奉るのみ……神州不滅の信念を堅持して、國體の精華を發揚し、……宸襟を安んじ奉らむことを期す……。」

「懺悔の時、正に到れり」(金子大策) というのは、「我等國民は、今や懺悔の情に沈ましめられている。如何にお詫を申し上げべきかは、會う人毎の言葉であり、何とも申譯ありませぬとは、互の通信に見る文字である。……後悔は人間の知識に屬し、懺悔は大御心に感じて現れし、純情

を體とするものである。それ故に、後悔なき者にも、懺悔はなきを得ぬであらう。……我等の懺悔は、此の父祖の誠忠に對するものであり、またそれ故に、その祖先の精神こそ、懺悔の心に於て傳持せらるべきものであらう。而してその精神の傳持が、向後の國民の親和を増進するものならば、それこそは禍を轉じて福とするものともなるのである……廣義の懺悔は、獨り敗者にのみあるべきではないであらう。世界各國いづれも平和を願わぬものが無いにも拘らず、何故に戦わねばならぬであらうか……我等は人間生活に於ける、深き宿業の懺悔なしには、平和はあり得ないことを、思わざるを得ぬものである。」

「編集日誌」(源) について「敵として撃てよと仰せらるれば、眞劍の力を盡して戦い、友として迎えよと仰せらるれば、満腔の誠を捧げて迎える、*『忘我真空』*の進止、一に承詔必謹、ただ大御心のあるが儘のみ、日本國民の明朗なる特異性は今や全世界驚嘆の的た然としている。自重せざらんと欲するも得ず、慚愧せざらんと欲するも得ず。」(八月廿九日)「大阪を中心に多くの軍需工場に歡迎されながら、大に達磨思想を説き、戦力昂揚生産増強につとめていた、臨濟宗の後藤光村氏は、今日までの關係上、閉鎖にならぬまでの各工場に、進んで出かけて、禪的心構えによる戦後の生活に邁進する様……」隨處に主

となる。底の心構えをもつて、その時々への推移に従い、決して心の動搖せぬ様己の力の足らざることを反省しつつ、苦しみを拜んで迎えよ、と叫んでいる。」(中外)「名譽ある終結」(教學新聞、八月)はいう「……敵の原子爆弾と蘇聯の背信とが、大東亞戦争の勇者日本をして、戦争を覺悟させたということは、我が亞細亞の使徒日本が、人類の文化保持と世界恒久平和との前に、宗教的信順の模範を示したものと云わねばならぬ。自國の正當防衛と亞細亞十億の奴隸解放の爲めに、汗と血とを以て戦いつつあつた、我が大東亞戦争も、人類の考えた科學が、人類自らの滅亡に突進せんとする刹那、我等は一切衆生の爲めに、毅然として自ら一切を捨てて戦争を中止し、以て菩薩利他の大道に就いたのである。」(中山)(理々)

九月。降伏文書調印。マッカーサー「日本管理方針」發表。バーチェット記者「ノーモアヒロシマズ」と打電。以後新聞記者被害地立入禁止。東京でフアーレル代將「廣島、長崎に放射能患者無し」と發表。GHQ、プレスコード發令、原爆被害發表禁止。GHQ、軍需に關する停止命令。陸海軍の解體命令。戰犯容疑者逮捕第一次指令、東條ら逮捕。天皇の戦争責任論、各國內におこる。ニューズ・ウィーク誌に漫畫、長靴をはいた天皇が血の河を渡つており、血の河の中に「Guilty?」の文字。天皇、

マッカーサー訪問。橋田邦彦自殺(六十四歳)。三木清獄死。GHQ、新聞ラジオの檢閲實施。GHQ民間情報局設置。プレスコード、ラジオコード公布。經濟團體連合委員會結成。日本勞働總同盟結成準備會。「人民評論」廢刊。

京城に第一回人民代表者大會、朝鮮人民共和國中央人民委員選出。重慶に韓國臨時政府成立、首班金九(一八七六一一九四九)、京城に韓國民主黨結成(金性洙ら)。ヴェトナム民主共和國成立(ハノイ)。パリに世界勞働組合連盟(WFTU)結成大會。

文部省、新教育方針中央講習會開催(十月十五・十六)の件、通達。「大東亞戦争終結に伴い、新日本再建ノ大使命ヲ擔ヘル新教育方針ヲ鮮明ニシ、之ガ指導精神ノ確立ヲ期シ」たもので、教員養成諸學校長及び地方視學官を對象に行われた。文部大臣、次官、局長がひとしく強調したことは、國體護持、教育勅語奉戴、日本の民主主義は君主統治主義と矛盾しないこと、この原則の下に「不必要なる干涉を招かぬため」「自發的に先手先手と刷新改良を加え」(前田)(文相)るべきだということ。

東本願寺光暢法主、全門末に教書、「承詔必謹、國體護持」を強調。本門佛立講「朝夕實前祈願文」承詔必謹、國體護持、正法興隆、國運伸展」同「寺院教會誓詞三

條一、恭シク大詔ヲ奉戴シ誓テ國體ヲ護持セン。一、斷ジテ艱苦ニ堪ヘ誓テ國運ヲ伸展セン。一、進ンデ正法ヲ興隆シ誓テ皇運ヲ扶翼セン。」同信徒日常心得十條一、天壤無窮の神勅を護念し、國體護持の信念を日夜に強固ならしむること。……」を布達。曹洞宗高階管長、「思想善導に挺身すべき敎家の任」の重大性を説き、「恭しく聖旨を奉體し……不動の信念を以て……新日本建設の礎石たることを期すべし」と告諭。淨土宗、全國において國民總懺悔運動「別時念佛會」を實施。黑住教管長「國體護持」の諭示。大日本戰時宗教報國會、機構改組、承認必謹、國體護持、民心安定の運動を開始。西本願寺光照法主「承認必謹の下、國體を護持し奉り……國運を萬世に開く」べきことを教示。一燈園、青年層と復員者に向つて、懺悔と祈りの新運動展開。日本基督教團、「本敎團の敎師、信徒は、此際聖旨を奉戴し、國體護持の一念に徴し、愈々信仰に勵み、總力を將來の國力再興に傾け、以て聖慮に應え奉らざるべからず云々」と決議。

賀川豊彦、「國際平和協會」創立、總裁東久邇首相。「自由懇話會」結成準備會、發起人、芦田均、安部磯雄、安部能成、有澤廣巳、石濱知行、片山哲、杉山元治郎、清水幾太郎、高津正道、宮澤俊義、馬場恒吾、賀川豊彦、河崎なつ氏ら二十二名。「文化人聯盟」發起人會（杉森

孝次郎、正宗白鳥、高野岩三郎、森戸辰男、辰野隆、新居格、山本實彦、芦田均、室伏高信、村岡花子氏ら）。一、聯合國文化の吸收、二、新日本文化の宣傳、三、國內文化の民主主義化、を目標とし、イ、戰爭責任者の究明、ロ、戰爭の背景となつた思想の究明、ハ、過去の日本文化の再檢討、ニ、民主主義の原則に基く新日本文化の建設、ホ、東西文化の交流、の諸テーマの研究に着手することを決定。龍谷大學、學長以下敎授の共同研究部第一部の「大東亞の佛教理念研究」を改め、「日本再建と佛教理念」を決定、主任、大友抱璞、佐々木憲徳兩敎授。大審院、大本敎事件の治安維持法違反について、無罪とした原判決を支持、上告棄却。病床の關管長、淚骨社主にかたる、「萬尋の谷底へ突き落されたやうで、三日ばかりは寝られなかつた。然し、陛下が戦えと仰有れば戦う、止めよと仰有れば止めるより仕方がない、これより仕方がないと考えて、外の事は何も考えないようにと思つて居つたが……無條件降伏というのだから無條件だが、昨日の内容を聞くというとは非常な得になる。面では、武器を茲で捨てるということは非常な得になる。今は惜しいように思うが、本當の道義日本、八紘爲宇の御精神を根本的理想として進むということが、武力で戦うよりもどれ程尊いことか、どれ程楽しみなことかわか

らぬ。」(九月十
四日) 臨濟宗宗務總長足山道源氏は云う「世界

を達觀する心眼を開かずして、末端の戦争意慾に奔つて
いたなど、もつての外である。大和は佛教の根本理念で

あり、日本の理想である、その和の基幹は大我である、

大我とは無我であり信順である、この滅私奉公こそ戦後

の平和建設の鍵である。」後藤光村師は云う「敗戦の原因

を数々かぞえる中に、肚のなかつたこと、丹田を耕す不

動の信念のなかつたこと……は何としても深省すべき一

事である。」(以上二篇)「平和國家樹立の力」(小林
信子)

く「今こそ、み民は一人のこらず正しき肚の力の持主に

なり得る機運を與えられて居る……御上よりのよろしき

御指示を切に切に念じ上げまつると同時に、御互は勵ま

し合つてほんとうに坐り、一息々々肚の力をこしらえる

事を、即刻思い立つて頂きたい。まず唯今の一息よりは

じめる。まことに申しわけなきにひれ伏した心で、おわ

びの心で、今の一息より精一杯丹田にひびく様に力を

入れる。……佛道、劍道、弓道、茶道、謡曲、能樂の

奥義は、みな肚をこしらえるという事が第一のねらい

……」(中外
日報)

「昭和維新来る」(椎尾
辨匡) 是はいう「承詔必謹、滅私奉公

……兵戈を捨て武斷を排し、丸腰となつて國際共生致平

に出直すもの、これ昭和維新の到來である。把て以て世

界の平和に致さんとする至醇大信は、陛下の忍び難きを

忍びて導き給う所以、挺身致平よく祖宗の遺業を恢弘し、

八紘爲宇を完成し給うものと承る。人心抵牾するも聖慮

に従ひ、事端勿卒、只茲に來れる昭和維新を、快活に明

朗に翼賛すべきである。」(中外日報九
月十一日)「日本國民の歩む

べき道」(小野清
一郎) 是はいう「吾等は大詔を奉體し死力を盡し

て戰つて來たのである。だが残念乍ら戰に敗れた。……

上皇室に對し奉り申譯ないことであり、下護國の英靈に

對し言うべき言葉に苦しむところであるが……畏くも玉

音による御詔を拜承し……今よりは忍苦精進以て國家の

再建に向つて一路邁進……大東亞戰爭は東洋民族解放の

爲の慈悲行であつたと私は信じている。……敗戦はやは

り因縁であり宿業である。しかし吾々はその宿業を荷い

つつ、遠き未來の淨土建設を理想として、愼しき忍苦、

忍辱の道を歩んで行こうではないか。」(同紙、九
月十五日) これら

の諸説から明らかなつたことは、(イ)佛教者は一様に戰

争責任を自覺していないこと、その根本原因は「承詔

必謹」の國體倫理であること。(ロ)戦争責任を意識する場

合には、國の内外の民衆に對してではなく、もつぱら天

皇に對してであること。(ハ)天皇に對する責任意識と民衆

に對する責任感缺如とは表裏一體である。

「戰雲餘情」(日光二荒山神社)
(宮司、高橋誠司) はいう、「畢竟するに、

今次大戦全體の中に、皇祖天照大神の御神慮に叶わなかつたものがあつたのだ……賣惜み、買溜め、闇取引、收賄、贈賄、詐欺、偽瞞、怠業、窃盜等々―國津罪にも擬せらるべき行爲……其處に今次大戦の最大敗因がある。

畢竟、此度の戦争終結は、天照大神の岩戸隠れであると、私は斷じたい。皇國何千年の歴史は、今や高天原まで還元したのである。……岩戸隠れの時の狀態に歸つたのである。五月、蠅なす邪神達のために、苦難の時が續くのである。此の常闇の社會を明るくするためには、如何なる辛苦をしても、天岩戸を開かねばならない。……其處に、天照大神は再び出現せられ、天照大神の御延長なる天皇陛下の大稜威は燦として八紘を照させ給うであらう。(同、九月十四日)「五月蠅なす邪神達」というのは、誰のことであらうか。

「大御言葉の深さ」(教學練成所員、
文博、佐藤通次) はいう、「はじめ

はどうしても大詔を陛下の御眞意と思う事ができなかった。……バドリオ的な勢力が陛下を擒にするに至り……などという疑念も起つた。……今こそ神國の神變不可思議が起つて、軍の蹶起、國內の淨化となり、眞に戦争一本の舉國體制が實現されるであらうと、いうことも期待せられた。……次第に承詔必謹の理におちつくようにな

つた。此度の聖斷にはバドリオ的な動きなどというものはなく、全く聖上の敎慮に出づるものであり……私の小智、私のはからいを捨てて、大御言葉のまにまに、隨順し奉るのが日本國民の道である(九月二日)……親鸞聖人は絶対の信の風光を語つて、よき人の仰せ蒙りて信ずる

ほかに、仔細なきなりと言われた。よき人の仰せの最も尊嚴なるものこそ、天つ日嗣天皇の大みことのりではないか……思えば、承詔必謹という臣民の道の原理を、掲げました聖德太子の言靈の威力、絶対の信を表現せられた先覺の體驗の深さなどが、吾々の身の内に生きている故に……承詔必謹の理におちつき得たのである。ここに歴史のいのちがある。(同)……天皇は宇宙の至尊にましますにより、國家の對立を越えたまう。しかしその絶対的御立場を相對の現實界を貫いて現じたまうが故に、日本てう一國家の元首として立ちたまうのである。それに對應して、天皇は勝敗を超えて永遠の勝者にましますのであるが、勝敗の相對界に生きたまうが故に、時ありて勝ち、また時ありて敗れたまうのである。天皇の御稜威が一時岩戸隠れするのは、國內問題としては……國際問題としては、外國の權が、天皇の主權を蔽うことである。……天つ日嗣を奉ずる明るい心を以て、この數年の不幸に耐えるべきである。天皇は國家の對立を超え勝敗を超

える高き御立場から、先きに大東亜の武力的解放を命じたまうた。しかるに吾々の誠足らず努力至らずして、陛下の所期し遊ばすごとき戦局を、招來することができなかつた。……國史を按ずるに、日本の武力的進出は一例外なく最後に破綻を來している。……内、護國の志を固くし、國に氣力を充溢せしめ、道義心を高く揚げ、深く文化を培うとき、日本はおのずから世界の中心、人類の歸服するところとなる。この度の御言葉は、敗戦を契機として、日本の本來の進路を昭示したまうたものではあるまいか。」(同紙、九・六)

敗戦の詔書をきいて「九天の高みから奈落の底に突き落された」この天皇信仰の學者は、やがて天皇の人間宣言によつて、もう一度奈落を経験することになる。

「日本佛教徒に與う」によれば、「我等の力及ばざりしを深く反省し、只管御託び申し上ぐるの外はない。……ここに總懺悔して道義立國に邁進すべきである……日本の思い上りを是正し……道義的生命力の喚起に獻身しなければならぬ。……敗戦の原因は……我が國何れの階級にも、眞に身を挺して戦争を指導する人材がないことであつた……眞に打算功利を超越した、道義的生命力の活用者が出現しなかつたためである。……かかる人物を養成するものは、教育と宗教である。……行解

相應、學行一體の國士的人物を……養成して、民族再興の原動力を培養するのである……かくして初めて我々は光輝ある國體を護持し得る……宗教者特に佛教家の奮起を俟つ所以である。(二〇・一)
(九・五)

(1) 註 細川護貞「情報天皇に達せず」、一七三頁以下

(2) 南博「流言飛語にあらわれた民衆の抵抗意識」(文學、一九六二、四)による。

(3) 大法輪、四月、順次に羽溪了諦、朝倉曉瑞、宇野圓空、増永靈鳳、里見達雄、山川智應

(4) 南博、前掲論文

(5) 大法輪、五月、順次に澤木興道、熊澤泰禪

(6) 思想の科學研究會「轉向」中、三三七頁

(7) R. Sherard, A Concise History of The Pacific War.

邦譯、(上)一九六頁

(8) 大乘禪、八月

(9) 大乘禪、七月、順次に原田祖岳、石黒法龍、柳澤翠巖

(10) 「哲學研究」二九卷、八・九合併號。もと「國體論」として頒布されたもの。澤瀉久敬あて書簡に、「本日原稿を御送り致しました。この原稿は元來々國家と國體」という様な題で書いたのですが……眞に國家の事を思い、思想的に我國家を

明にしたいと思う人々や、眞の研究者には、かかる私の考も、何等かの参考になりはせぬかと思ひ、
「哲學研究」という如

- き、誰が見ても純學術的な雑誌にのせ、多少とも京大哲學部の人々のためにもと、考えた次第で御座います。眞の眞面目な學徒の外には、知られたくもないのです。」とある。ただし「全集」によれば、十二月五日附になつてゐるが、どういふわけであらう。ともかくこの論文は、西田の國家觀・國體觀の面目を示すものとして注目される。
- (11) 南博、前掲論文による。
- (12) 連合軍司令部「太平洋戦史」、ニミッツ提督「太平洋艦隊コミュニケ第一六八號」
- (13) 三枝康高「思想としての戦争體驗」、一九八頁。
- (14) 上告棄却となつた尾崎が、死刑執行を前に、執筆提出した最後の上申書、「死に直面して」が、戦後發表された。「改造」昭二五・八月號
- (15) 「世界」一九六〇・五月號「中國人強制連行の記録」が、その詳細を傳えている。
- (16) 大乘禪、順次に柳澤翠巖、山崎益洲、原田祖岳。
- (17) 教學新聞、一二・二、關精拙
- (18) 南博、前掲論文。
- (19) 中外日報一・一四。
- (20) 文化時報、一・二二。
- (21) 平凡社「日本史料集成」、五九七頁。同解説に「開戦以來最初の重臣の個別拝謁が行われた際の近衛の上奏文。終戦工作を推進した支配層の降伏意圖が、もつとも端的に示されている。四月には吉田茂、岩淵辰雄らが憲兵に拘引され、この上

- 奏文の内容が追求された。」
- (22) 南、論文
- (23) 同右
- (24) 傍點市川。日本の國體に世界的意義を見出したい、という西田の意圖は不可能かつ危險である。拙論「絕對無のつまづき」(思想、昭三四・一月號)同「禪・華嚴・アナキズム」(自由思想、昭三六・五號)拙著「般若經」第三章(三一書房)等參照
- (25) ボンヘツファー「現代信仰問答」「誘惑者」「たとい我死の蔭の谷を歩むとも」(獄中書簡)いずれも邦譯。澄田健一郎「ボンヘーファー・その人と神學」。
- (26) 東京軍裁記録、毎日新聞、昭二一・一二・二一。
- (27) 増永靈鳳、中外日報、五・二五・一六・一。
- (28) 大原性實、中外日報、五・一九。
- (29) 唐澤富太郎「學生の歴史」二七七頁による。
- (30) 南、論文
- (31) ブラッケット「恐怖・戦争・爆彈―原子力の軍事的・政治的意義」(邦譯)二一頁。一九四五年六月、原爆製造に参加した六人の物理學者が、委員長ジェームズ・フランク教授の發案による、ジェームズ・フランク報告を國防省に提出、日本へ原爆を投下すべきでない、と警告した。また六十四人の科學者が、次の要項の警告を大統領に提出した。(イ)新兵器は、連合國の全加盟國の立合ひの中で、展示さるべきこと、(ロ)そのあとで日本政府に降伏勸告の最後通牒をだすべきこと、(ハ)

この通告が拒否された場合、連合國の承認を得、米國內の世論に問うて、始めて投下するか否かをきめるべきこと。(ゲオルク・メンデ「實存主義研究」日本版への序文による。)

廣島・長崎への原爆投下者ロバート・イーザリーの、深刻な罪惡意識については、ロベルト・ユンク「呪われたある男の記録」参照、「中央公論」一九六一・九月號。

(82) 増永靈鳳、中外日報。

(83) 中外日報、八・二八—二九。

(84) 文部大臣官房文書課「終戦教育事務處理提要」第一集、七三—八三参照

(85) 増永靈鳳、中外日報、昭二五・九・一八—二一。

日独戦争

「新布教」戦争と佛教號、六十餘師の説、大屋徳城のほかは類似。佛教の根本義から反戦するか、正義の戦の名で妥協するか、何れかである(大屋)。弱肉強食は永續的。双方殺し合えば双方疲れて、當分平和(間宮英宗)。理想は無戦だが、國家の命には背けない(高嶋米峰)。私は反戦者だが、戦争になつた以上、國光を輝かさねばならぬ(龜谷聖鑒)。私は非戦論者だが、戦争論者に轉じた(曉島敏)。戦争は浅ましくとも、念佛の中に入れて尊く染めあげねばならぬ。念佛は一切を靈化する(多田鼎)。南無とは上からの命への敬順。勅命に敬順する臺灣、朝鮮の民は順民(南条文雄)。國家の道徳は、權利(殖民地の權益)と義務(日英同盟)の尊重にある。我々はそのために戦う(稻村修道)。(大正三年、十二・十三號)

後篇 序章

戦争體驗が提起する諸問題

戦争體驗が、日本の佛教者にとつて、すぐれて哲學的・倫理的事件であることを、われわれが自覺し、この歴史的經驗の分析・點檢をとおして、佛教學および佛教倫理を建てなおす必要があることを、さきにのべたが、ここでは戦争體驗がわたくし自身および佛教學に、どのような問題を提起しているかについて、序奏的にふれておきたい。

A、主としてわたくし自身の問題

まず二つの想定からはじめよう。イ、もしも日本が戦争に勝つていたとするならば、日本の佛教および佛教學は、戦前ないし戦時中の論理と倫理とを、まもりつづけているであらうか。敗戦を契機とする佛教および佛教學の變質または變貌は、佛教の根本的立場から、それぞれどのように評價さるべきであらうか。その根本的立場は、一義的にかつ仔細に明らかであらうか。このことをわたくし自身について檢證する必要がある。ロ、日本がふたび戦争にまきこまれる危機に直面したばあい、わたくしはわたくしの全存在をかけて、これにプロテストするか。「然り」と斷言する自信が、いまのわたくしには無

い。―戦争は、はたして佛教者が全存在をかけて、プロテストしなくてはならぬものなのか、という問題があるが、ここではそれにふれないでおこう。―一般化しているならば、思想信條の論理を厳正につらぬきとおす貞操がある、とわたくしは斷言することができない。したがってわたくしには、わたくしの操守を根もとからゆるがすような危機をかもしだすおそれのある、國の内外の原因、動向、情勢にプロテストする、民主・平和諸勢力の生長擴大のために、わたくしの微力を理論と實踐のなかで、きたえみがく必要が、根源的に生ずるわけである。すくなくともこのことをはなれて、わたくしの戦争責任をつぐなう道はない。

さまざまな自己辯護をとりかけていうならば、要するに、肉體的生命への愛着が、眞理への愛よりも大きかつたのである。もしも正理―とくに社會倫理の領域での―を主張し、それにしたがって行動することをおそれない態度を、佛教の術語をもちいて、「無畏」とよぶならば、そうした無畏にわたくしが缺けることを、戦争が明らかにした。「或イハ王難ノ苦ニ遭ウテ、刑セラルルニ臨ミ、壽終ラント欲センニ、彼ノ觀音ノ力ヲ念ゼバ、刀尋イデ段々ニ壞レナン。或イハ枷鎖ニ囚禁セラレ、手足ニ桎械ヲ被ムランニ、彼ノ觀音ノ力ヲ念ゼバ、釋然トシテ解脱

スルコトヲ得ン。」(法華經・觀世音菩薩普門品)の因縁を、治安維持法ないし宗教團體法のもとで、身をもつて究明することがなかつた。「行カント要スレバ即チ行キ、坐セント要スレバ即チ坐ス。」(臨濟)「思いのままになすわざぞよき」(至道無難)などという自由は、わたくしのどこにも無かつた。この自明な、しかし士性骨にこたえる事實が、わたくしの戦後責任の自覺の中樞にうずきつづけることになつた。

わたくしのばあい、歴史の現實にたいする具體的批判が困難になるにつれて、自分の期待と希望を現實のなかへ讀みこむことによつて、現實を合理化し、思考と行動の怠慢と無力へのやましさを、ぜんじ忘れるとともに、歴史的現實にかかわる發言が、したがって發想が、やましさへの自己説得もしくは自己辯護をふくんだ。社會についても自分についても、タテマエと現實との龜裂が、意識的にか無意識的にか輕視されることによつて、かつ、身邊の生活空間と世界史的生活空間との、内容・構造・原理のちがいを輕視することによつて、公私についての發言が、大言壯語にかたむいた。佛教にいう「妄語」ということを、タテマエ(この場合は曲學の意味)の表白と、ホンネ(この場合は正理の意味)の把持との分裂・緊張の狀況とみるならば、この分裂・緊張がホンネの把持の方から、弛緩しなだれ

むことによつて、妄語による内心の痛みを行衛不明にした。

作りたいかなる形にも縛せられずして、しかもいかなる形をも自由に創造する主體が、わたくしのばあい、國體明徴期の精神總動員體制のもとで、究明されもしくは堅持されたとはいえず、ましてゆるぎなき破邪顯正が、國家神道の跳梁にたいして展開したとはいえず、「境に轉ぜられず、處々境を用い」「境に乘ずる」(臨濟)底の思考と言動が、體究され實踐されたともいいがたい。タテ

マエとホンネとの増大する距離のなかで、(イ)希望の読みこみによる現實の合理化と、(ロ)現實の不合理は、やがて歴史が審判し克服するという受動的期待と、(ハ)宗教は本質的に歴史を超えるという主張との三つが、わたくしの内部で、相互點檢のダイナミックスを構成するにいたらなかった。希望の読みこみによる現實の美化が、實相觀の歪曲と紙一重であることの自己反省が足らず、現實の不合理を克服する歴史の主たる創造者が人民大衆であるとするならば、この大衆が現在どこにいるのか、もしくはどのようにして見いだすのか、その大衆と自分とをどうして結びつけるかという問題が、眞剣な問題とならず、宗教が世捨てとの風流として歴史から退避するのでないとするならば、當然、目前の大陸侵略における天皇の態

度、國家神道、天皇制ファシズムにたいする、超歴史的視點からの具體的批判が、なされねばならないのであり、この現實にはたらく社會倫理をもたぬ宗教は、けつきよく逸民の氣ままであるか、大乘のまやかしである、という反省が徹底しなかつたのである。要するに、すべてが灰色であり、あやふやであり、その日ぐらしであつた。

これまでのべてきた諸事實は、社會倫理へのわたくしの意志と情熱が、佛教の根本的立場から、内面的なしかも強健かつ執拗な必然性をもつて、展開する理路が確立していなかつたという中心事實の、あらわれにほかならない。したがつて、社會正義が佛教において、どのような根據と法則と構造と、そして力をもつて現成するかが、わたくしには明らかでなかつた。社會的責任の自覺についても同様である。歴史にたいする責任の倫理が、般若の空慧からどのようにに胚胎し、現實のなかにどのような文脈をたらぬかが、主體的に明らかではなかつた。それに伴つて、たとえばアジアの諸民族にたいする責任、中國人民にたいする、朝鮮・臺灣民族にたいする、日本民族としての共同責任の自覺が、稀薄であつた。日本の帝國主義を、理論的には否定しながらも、この責任の自覺が實感として稀薄であつたことは、わたくしの意識の深層に、「後進」諸民族にたいする差別感、「東亞の盟主」

といった気分が、よこたわつていたと思われる。竹内實は、「戦時中の日本に、風潮として存在した民族的使命⁽¹⁾は、實際上は、植民地大衆にたいしては戦犯的であつた。」と書いているが、同じことは西田幾多郎における形相としての民族と質料としての民族という概念規定についても、いえるであろう。⁽²⁾「大東亞戦争」が、アジア諸民族のために、獨立への途をひらいたという見解——こんにちこの見方をとる人びとの大半が、アジア、アフリカ、ラテン・アメリカの解放獨立のたたかに、積極的な支持を示していない。——の誤りと思ひあがりについては、さきに詳述したとおりである。⁽³⁾「大東亞戦争」のこの意味の是認者の多くが、こんにちネオ・コロニアリズムの事實上の支持者であり、さきの侵略的愛國者がいまの買辦的愛國者であり、かつての「欽定憲法」禮讃者が、こんにち「押しつけ憲法」改定論者であり、戦時中の翼賛佛教者の多くが戦後の非政治主義者であることは、ひとつの宿業かと思われる。

B、佛教と佛敎學の問題。

西歐の世界は、宗教の名による戦争の歴史をもつが、佛教はそのような歴史をもつていない、というたぐいの史観は、「聖戦」に参加し「國內思想戦」に協力した、佛

敎界の經驗によつて、修正される必要があるであらう。聖戦イデオロギー・思想戦イデオロギーとしての國家神道を、理論的にも實踐的にも翼賛した、「祭政一致」體制下の佛教は、そのかぎりにおいて、反共、反ユダヤ（それはアウシュヴィッツにつらなる）、反基督の名による異端折伏の法戦に、教化動員をおこなつた事實を、まず謙虛に卒直にみとめなければならぬ。この事實を理念的に支えたものは、日本神話の「事實」、肇國の「事實」、おおまかにいえば皇國史觀による事實の理であつた。

當時「事のなかに理を見る」歴史形成の論理・倫理を強調したものに、西田幾多郎ないし京都學派および倉田百三、そして佐野、鍋山の轉向聲明があつた。ここにある「事」は、大日本帝國憲法、敎育勅語、治安維持法のワクのなかでの「國史の事實」であり、「國民感情」であつた。事實主義の論理は、日本民族の神話的歴史と、それにもとづく歴史的衝動に、理を讀みこみ、理を見ようとした。「如實知見」といい、「實相を見る」といい、私心をはなれて「ものごとをありのままにみる」といわれた。狐疑をすて、ことあげをすて、小我のはからいをすて、實相を無心にありのままに見るまなこは、このばあい、主として明治以降の國民敎育による、特定の屈折率をそなえていた。いうなれば意識のタブラ・

ラサは、それに何かをえがけば、たちまち裏がわの色がにじみ上つて、えがかれる色とまざりあつた。もともとそれはタブラ・ラサなどではなかつた。まして「明鏡止水」ではなかつた。私案をすてる、我執を空する、私を滅する、自己を忘れる、自力のはからいを離れる、というばあいの「我」「自己」「私」は、「公」權力に對する「私」であり、「おおみことのり」とその「公」的解釋による「おおみところ」と「みいず」とに、和して一となつた「佛教的大我」「佛法的絕對」に對する、「わたくし」であり、「はからい」であり、「ことあげ」にほかならなかつた。軍神杉本五郎の「大義禪」がしめすとおり、「おおみところ」と「法身」とのあいだには、すこしの斷絶もけじめもなかつた。「絕對無」の「場所」そのものでさえ、すでに久しく、政治するものによつてあたえられたヒズミをもつていたことを、「大東亞戦争」にかんする西田、倉田の言表が實證した。「實相をありのままに見る」まなこに、そうしたヒズミをあたえる、意識の深層の形なき形を、堀りおこし、對象化し、「大死」をつきぬけた「絕對無」の、思惟以前の聲なき聲を、意識の明るみにとりだし、對象論理の俎上にのせて、切開し洗滌し處理する對象化の作業精神、これをわたくしは「無住心」もしくは「柔軟心」とよびたい。「八識田

中に一刀を下す」ということは、對象化をゆるさぬという「無住の本」「無底の底」「無相の自己」を、あえて堀りおこし對象化することを、含むのでなければならぬ。對象化をゆるさぬといわれる「根本主體」を、あえて對象化する、いわば不逞な冒瀆的な破天荒な謙虛を、無住心とよび、サルトルの術語をこの意味に轉用して、「淨化的反省」とよびたい。(いわゆる「識神ヲ認メテ根本ト爲ス」という、その覺認のはたらきを對自化し、かつ無化することを、ここでは述べているのではない)。「根源的主體」「絕對主體」に粘着した形なき形、聲なき聲を明るみにとりだし、「足場なき足場」そのものを堀りおこす、徹底對自化の淨化的反省を缺いたところに、西田における「絕對無のつまずき」があつた。佛教社會倫理の建設のためには、まずこの意味の淨化的反省の視座と論理が、確立されねばならぬ。⁽⁵⁾學道におけるこの意味の對象的・思惟の根據づけ―どこにたれが根據づけるのか―と位置づけとが、佛教學において確立されねばならない。根源的・主體的「場所」を、「歴史的世界」における「場所の自己限定」を、その自己限定における「絕對自由」を、あえて對自化する作業が、修道に不可欠な本質的契機として、方法的基礎づけをもつことが必要である。佛教は、そうでなければ、けつきよく妙好人的世界を超

えることができない、とおもわれる。空體驗とこの淨化的反省との、根源的・原理的連關が、主體的に把握されることによつて、西田の「禪」というものは、眞に現實把握を生命とするもの⁽⁶⁾、ということが、實をむすぶ主體的條件をそなえるのではなからうか。諸先匠の高教を仰ぎたい。

この文脈における、戦争體驗の考察のなかで、注目される二つのケースがある。高楠順次郎と倉田百三の場合がそれである。東京帝國大學名譽教授、文學博士、文化勲章受章者、大正新修大藏經責任監修者であつた高楠が、どうしてあのようにフアナティックな戦争支持者になつたのか。「大正が生んだ妙好人の典型⁽⁷⁾」と評價される、あのたぐいまれな誠實敬虔な求道者倉田が、どうして神がかりにも似た聖戰禮讃者となつたのか。いいかえるならば、高楠に代表される該博な佛教學識、倉田に代表される深奥な佛教體驗が、社會倫理の次元において、あのようなイデオロギーに形象化したことは、まれな異例の偶然にすぎないとして、見すごしてよいことがらであらうか。もしそうでないとするならば、その論理のおよび實存的コンテキストはなんであり、それはどのように分析・評價・揚棄すべきなのか。もしも戦後のこんにち、生存していたとするならば、高楠と倉田とは、その思想

・信念體系を、堅持することができたであらうか。もしもできなかったばあい、従前の體系を、無傷のままに「終戰處理」したのか、または解剖、治療したであらうか。高楠も倉田も、如實知見を説き、實相觀を提唱したが、私心を去つて事實をありのままに見るというばあい、歴史の世界において、その「事實」を大規模につくる主たるエネルギーは、被支配者とのダイナミックな緊張關係にある、國家權力である。現實をふまえて、現實のなから現實をきりひらく道を形成するといふばあい、その現實が個人の力をこえたエネルギーと速度と規模をもつて、展開しもしくは飛躍しつづつあるという事態の認識に立つて、この事態に對處する、根本的かつ效果的な原理と方法が、明らかにされねばなるまい。「いまやわたくしの仕事はこれのようにして、既成事實に身をすり寄せることによつて、國家權力に身をすり寄せることになつた。」⁽⁸⁾ (拙論「挫折」と轉向)

安心^{あんじん}の道の實質は、最惡の事態にもやすんじて生きることである。「どういふ惡政惡制の下にあらうと、そこに幸福——全性保眞——な生活を創造してゆこうと、苦心しているのが、私もネオ・タオイストのころがけなので、わが日本の十年後の政治がどうありたいという考えは、すこしも湧いて來ません。」⁽⁹⁾ (伊福部 隆彦) ここに既成事

實の受動的認容の態度、既成事實への適應の態度がうかがわれる。既成事實への積極的な受動性は、容易にこの事實への参加協同に轉ずる。この参加協同は、なんらかの自己説得の論理をともなう。大規模な既成事實の主たる形成者たる國家權力によつて、既成の現實との和合を説く宗教が、重んぜられるゆえんがここにある。この宗教の效用が、こんにち、いわゆる國づくり人づくりのプログラムの中に、くみこまれてゐること、宗教界にもすでにこれに應ずる態勢が展開してゐることは、知られる通りであるが、この效用を最大限に利用したものが、戰時教化總動員體制であつた。理想主義態度の否定は、宗教的安心の論理と表裏するものであるが、この否定が人間の情性的安逸（事なかれ主義）と利害の打算とに結びつくばあい、現實主義はヨリあしきものとなる。得失是非をわすれた美的風流の民族性も、現實主義をたすけるであらう。

物にこだわることなく、先行する問題を、漂々として御破算にしてゆく、老境的洒脱と圓熟からみるならば、理想主義的プロテストは、人間の狹量と、肚のなさと、境涯の未熟と、要するに人間が出来てゐないこと、大人になつてゐないことを意味するであらう。國家權力に抵抗した一、二の例外をのぞいて、挫折と轉向とが、佛教

界においては戰時中におこらず、むしろ敗戦とともにおこつたこと、しかも敗戦による挫折と轉向が、十分な自覺に高められず、佛教倫理の全面的崩壞の事實が、學問的反省にまで高められてゐないことは、佛教における戦争體驗が終戰處理事項として、手輕に後片付けされ、焼却され、これを空前の人間體驗として、その廣さと深さにおいて、十分に對自化され、執拗に追究されてゐないことを意味しよう。洒脱と無著と忘却の教義は、このばあいはなだ重寶である。圓融無礙の自由、任運騰々の妙用^{まうよう}だけあつて、「きんりつふく隔離不融」「じんぎやくふりゆう順逆葛藤」の原理原則が、主體的に確立されていないところ、是非善惡の揀擇^{けんじやく}がたちまち氣體化するところでは、挫折も轉向も起りようがない。挫折の愚直いぜんに忘却があり、轉向の醜態いぜんに圓轉滑脱がある。敗戦による挫折も轉向も、じつは挫折とか轉向とかよばれるような、けじめのあるものではなかつた。昨日は任運騰々、今日は騰々任運である。このような事態は、佛教において、社會倫理への熱意が、佛教の根本的立場のなかで、どのように胚胎し、どのような理路において展開するのか、明確でないことと本質的に關連する。不思議不思議の空體驗から、善惡是非の自覺と規準とその足場とが、蒸發せず流動化せず、どのようなロゴスにおいて形成され確立されるかが、明

らかでない事實と關連する。たとえば事々無礙圓融の境界において、社會正義の定立と實踐に相當する倫理形成という意味での、「隔歴不融」の齒止め、不可透入性、理想主義的執念の摩擦點が、どのような根據と必然において生起し展開するのか、妙用の境界をつきぬけて、不安と疑惑、怒りと對象論理および對象的實踐の世界が、どのようにして再構成されるのか、その心理的・論理的プロセスが、明らかにされ、主體的に確立される必要がある。「煩惱を斷ぜずして涅槃に入る」とか「非道を行じて佛道に通達す」とかいわれるのであるが、怒ることを忘れ、對象論理を蔑視して、歴史的世界の健康な創造者になれるわけがない。それは精神の榮養失調である。しかしその半面、われわれの思考、とりわけ倫理、道德の分野におけるわれわれの言論と行動は、われわれが主としてぞくする生活圏の性格と傾向にしたがつて、意識的無意識的な自己規制をおこなうことを、みとめなくてはならない。この意味の他律性から、常にかつ完全に自由であることは可能でない。このことを謙虚に卒直にかつ明確にみとめるばかりでなく、この認識をわれわれの思想信念體系のなかに、なかば公開的にくみこまなくてはならない。このことをおこなうばあい、われわれは自信過剰と自己欺瞞と大言壯語におちいる。

なお、戦争體驗がわれわれに提起する問題に、イ、責任の倫理、ロ、暴力の論理、ハ、和合と平和の論理と倫理、ニ、國家權力の問題(これは別に考察する)、ホ、天皇制と國家神道の問題がある。(天皇制と國家神道については、わたくしく考察した。) (のべつの諸論稿において、すでにくわし

イ、責任の倫理。自業自得についての、社會的責任の倫理が、佛教において確立される必要がある。たとえば天皇は、その人間宣言(昭和二二)において、「現人神」の思想を、「架空なる觀念」として否認したが、その「架空なる觀念」の長期にわたる跳梁をゆるし、悽慘な禍害を國の内外にもたらした―それは「架空なる觀念」などという手輕なものでは斷じてなかつた。舊憲法第三條をみよ。ここからみちびかれた治安維持法等をみよ。小林多喜二を惨死させ、三木清を獄死させ、作家中本たか子を發狂させ、牧師小山宗祐を自殺させたのは、この「架空なる觀念」であつた。―責任を、どのようににはたしておられるのか。廣島、長崎の歴史的地獄は、國體護持、もしくは「架空なる觀念」護持のため、ポツダム宣言の受諾をしづつていた期間に出現した。こんにち世界は、全人類二十八億を、十七回全滅させるだけの核兵器を保持するといわれ(林克也氏、一九六二・一二・八・TBS)、日本は「被害國から加害國に變ろうとしている」といわれるとき、たとえ

ば日本の核非武装のために、天皇は何をなされつつあるのか。平和をまもる努力すら、政治性の名においてゆられなければならないならば、天皇は戦争責任をはたすパースナリティを、どこにもたれるのであろうか。少くとも天皇は、渡邊清「少年兵における戦後史の落丁」(思想の科六〇年)「戦歿農民兵士の手紙」(岩波新書)および「中國人強制連行事件に關する報告書」(世界一九九〇年五月號)を、讀まれるべきであろう。映畫「雲ながるるはてに」のなかで、出撃する特攻隊の一航空兵が、友人深見にのこした言葉は、「深見、戦争のない國へ行つて、待つていろぞ。」であつた。「死んだ人々は、もはや黙つてはおられぬ以上、生き残つた人々は、沈黙を守るべきなのか？」(ジャン・タルジュ)わたくしのような微小な日本國民の幾百萬が、それに見合つた戦争責任を、多少ともはたさうとしてゐることを、考えていただきたい。われわれ明治の民もまた、たとえば「對支二十一カ條」のごときものにたいする共同責任を新たに自覺すべきであり、日中兩國がいまなお交戦状態を終結してゐない事實を重視すべきである。「皇軍」による非道な阿片政策と南京大虐殺を思へ。焼き拂われた地區の門扉にのこされた文字「恨千年不消」を思へ。「日の丸」を見ると、身ぶるいを感じる無數の人民が、いまなお生きてゐる、という中國要路者の

言葉を思へ。「過去のことは忘れましよう」というわれわれへの挨拶は、忘れようにも忘れられない彼ら自身への、自己説得の試みでもあろうか。

一層原理的には、自業自得における責任の倫理の、佛教における存立根據を明確にし、責任と表裏をなす人格の自由が、無我の立場と理法において、どのように基礎づけられるかを、明らかにすべきであらう。倉田百三は、かれの「法的自然主義」をもつて、「責任を神に歸する道」だと規定し、責任からの解放による安心を説いたが——倉田「善惡を横に截る道」参照——倉田のいう「清淨心の催し」、夏目漱石の「則天去私」、道元の「佛のかたよりおこなわるる」自然の道、個己が超己の催しもしくは促がしのままに、必然即自由において進退する場において、責任の倫理がどのようにして成りたつのか。このことが明らかにされねばならぬであらう。戦争責任の問題が、佛教においてとりあげられたことがないのは、佛教者個人の道德的反省の問題という以上に、責任の倫理そのものが、佛教の思想空間に座席をもたず、佛教の根本的立場になじまないのではなからうか。ここに戦争責任にたいする、佛教者個人の倫理的反省の場をこえた、一層原理的な問題がある。

口、暴力の問題。近代日本の佛教は、戦争を積極的に

是認し、これに協力するか、またはそれを默認することによって、事實上暴力を肯定してきた。―例外として妹尾義郎らの新興佛教青年同盟がある。―この暴力肯定の姿勢と論理は、こんにちも變つていないか。佛教において暴力が認容されるのは、どのような理法においてなのか。階級闘争を否定した西田幾多郎は、戦争には必ずしも反対しなかつた。天皇の詔は西田にとつて絶対であり、天皇が宣戦した國事に、反対することはできなかつた、という一半の事情もあつたであらう。階級闘争を否定することは、まことに容易であるが、敗戦後のこんにちとちがつて、戦争を否認するためには、自己の存在をかけた、國家權力と天皇制の信條體系との、双方へのたたかひを必要とした。戦死には名譽があり、遺族には公私双方からの保護がある。主戦論と反戦論とのあいだには、勇氣の條件にいちじるしい違いがある。「不惜身命」ということは、反戦思想にとつては、至難のわざである。暴力を「相手の意思に反して、かれに加えられる物理的壓力」と規定するならば、この意味の暴力の頂點に、戦争と暴力革命がある。倉田百三はかれの「大乘的生命主義」の立場において、戦争を是認するとともに、階級闘争と暴力革命をも是認した。暴力肯定の文脈において、倉田の論理は西田のそれよりも、首尾一貫していたとい

えよう。佛教が社會倫理をもつとするならば、暴力の嚴密な分析と検討をおこない、暴力にたいする態度を明らかにし、實踐を確立する必要があるであらう。この問題が佛教倫理において、いちども本格的にとりあげられなかつたことは、われわれ佛教者もまた歴史的・社會的制約のもとにあることをしめしている。

ハ、和合の論理と平和の論理。佛教における戦争體驗は、一般社會のばあいとおなじく、和合の論理・倫理と平和の論理・倫理とが、たがいに相容れない關係にあることを立證した。この事情は、こんにちも本質的にはさほど變つていない。日本の核武裝を計畫している諸勢力、日本國憲法第九條を改惡し、海外派兵と自衛戦争を合理化しようとする政治勢力が、「人づくり」の道德教育、とくに和合の倫理の熱心な唱道者であることによつても、それは知られよう。侵略戦争を支持したファシスト中野正剛の東方會「全體主義政策綱領」(中野正剛、杉森孝次郎編著、昭和十四年)第五項は、「全體主義に則り、階級の特權と階級闘争を排除すべし。」とのべているが、近代日本の佛教もまた、おおむね和合の論理を唱道して、平和の論理を否定してきた。教育勅語、軍人勅諭、國體の本義、戰陣訓は、すべて和合について力説した。いわゆる「一億一心」「一億玉碎」「一億總懺悔」もまた、和合の論理の具體化には

かならなかつた。和合のモラルが否認するものは闘争(理論闘争を含む)であり、是認するものは搾取と戦争であるのに對して、平和のモラルが否定するものは戦争であり、肯定するものは反戦、民主、獨立の闘いである。平和のための闘いが矛盾でないのは、和合のモラルと戦争の「モラル」とが、矛盾しないのと同様である。和合の論理が戦争の論理に通ずるがゆえに、平和の論理は闘争の論理とならざるをえないのである。和合の論理が體制擁護の論理であり、平和の論理が反體制的であることを、歴史がしめしている。華嚴の事々無礙法界の論理からみちびかれる社會倫理は、これまでのところ、すべて和合の倫理であつた。⁽⁹⁴⁾(たとえば高楠順次郎、山上戒全、江部鴨村、鈴木大拙、龜川教信)こんなにちわれわれが享受している信教の自由は、國家權力との和合による産物ではなく、人類の多年にわたる闘いの成果 fruits of the age-old struggle of man to be free (The Constitution of Japan) であることを、忘れてはなるまい。信教の自由の歴史は、しかしながら、異教禁壓に協力した佛教界の、共同責任を記録している。和合の論理と平和の論理との、矛盾的緊張構造が、佛教倫理において十分に自覺されず、論究もされていまいように思われる。階級闘争の問題についても同様である。しかしながら、ここで指摘されねばならないことは、

平和の論理が新しい和合の論理を創造しなければならぬということである。(そしてこれは、さほどやさしい仕事ではない)⁽⁹⁵⁾なぜなら、平和の論理が内蔵する闘いの論理は、味方のうちにたえず敵を見いだす權力意志、官僚主義、セクシヨナリズム、および畫一主義の危険をはらむからである。即非の論理と倫理、無礙の論理と倫理が、あらためて見なおされる時節があるであらう。

近世ないし近代の日本の政治は、政治せれるものの生命の否定をふくんだ。宗教は、その此岸的生の否定という契機を媒介としてこのような政治機能に協力する場合があつたが、敗戦を境として、生命の尊重に轉じたことはよろこばしい。

一九六〇年夏、NHK教育テレビ「日本の文學」の講師たちは、天皇制と戦争とによつて、日本の古典文學ないし現代文學が、はなはだしくゆがめられたことを指摘し、傳統の自由な探究と正しい繼承が、敗戦によつて容易になつたことを強調したが、これはわがくにの學問、歴史(學)の全體についていえることであり、佛教についても例外ではなく、舊憲法第三條「天皇ハ神聖ニシテ侵スベカラズ」の至上命法が、日本佛教にくわえた規制力の膨張は、基督教、大本教などの場合の比ではなかつたにしても、まことに重大であつた。宗教者が政治に無

關心でありえないこと、神社神道の動向に無關心でありえないこと、政治への警戒と監視を怠つてはならぬことの、ひとつの理由がここにある。民主的自由がつぎつぎに侵されてゆく「自由國家」のなかで、信教の自由だけが、安泰であるはずはない。さきに基督教、大本教などが弾壓されたのは、「共産分子根絶のための」治安維持法、治安警察法によつてであつた。絶対主體に生きる禪者たちが、同時に、「汝臣民」として、政治權力のまなざしのなかで、客體化されているという事態の構造分析が、佛教者に缺けていたと思われる。天皇制イデオロギーと近代日本佛教イデオロギーとの、理・事両面における連關の構造と系列とを、佛教の根本的立場から、徹底的に検討する作業のなから、新しいパースペクティブをきりひらくことが、佛教思想史におけるこんごの課題であらう。(一九六二・一一・三〇)(四三頁補説へつづく)

註

- (1) 竹内實「使命感と屈辱感」(『現代の發見』Ⅲ、一七〇頁)
- (2) 西田幾多郎「哲學論文集第四補遺」、西田幾多郎全集、別卷六所收。
- (3) 禪學研究、五二號、拙論、一三一頁、大乘禪、昭三六・十二月、拙論「續挫折と轉向」
- (4) 拙論「絕對無のつまづき—西田幾多郎の場合」(思想、一九五〇年一月) 拙論「現代佛教の自己回復」(思想の科學、一九

六一年一月)

(5) Ichikawa, A Preliminary Conception of Zen Social Ethics. (印度學佛教學研究、通卷二二號所收)

(6) 西田、西谷啓治あて書簡(一九四三・二・九一)

(7) 龜井勝一郎「現代人の研究」、八三頁。

(8) 大乘禪、昭三六・二月、拙論「挫折と轉向」。

(9) 新政經、通卷一四七號。

(10) 拙著「般若經」(三一書房)第三章「般若と天皇制」。拙論

「禪・華嚴・アナキズム」(自由思想、一九六〇年第五號)。

(11) 一九五一年十一月十二日、京都大學におけるいわゆる天皇事

件での、天皇への京都大學同學會の「公開質問狀」(天皇への傳達を拒否された)に、こうある。「……しかし貴方は今

も變つていません。名前だけは人間天皇であるけれど、それ

がかつての神様天皇のデモクラシー版にすぎないことを、私

たちは考えざるを得ず、貴方が今又、單獨講和と再軍備の日

本で、かつてと同じような戦争イデオロギーの、一つの支柱

としての役割を、果そうとしていることを、認めざるを得な

いのです。……質問、一、もし、日本が戦争にまき込まれそ

うな事態が起るならば、かつての終戦の詔書において、萬世

に平和の道を開くことを、宣言された貴方は、個人としてで

も、それを拒否するように、世界に訴えられる用意があるで

しょうか。二、貴方は、日本に再軍備が強要される様な事態

が起つた時、憲法に於て武装放棄を宣言した日本國の天皇と

して、これを拒否する様呼びかけられる用意があるでしょう

か。……五、廣島、長崎の原爆の悲慘は、貴方も終戦の詔書

で強調されていました。その事は、私たちは全く同意見で、

それを世界に徹底させるために、原爆展を製作しましたが、

その開催が貴方の來學を理由として、妨害されています。貴

方はそれを希望されるでしょうか。又私たちはとくに貴方に

それを見ていただきたいと思いますが、見ていただけるでし

ようか。……」

「お願い 神様だつたあなたの手で、我々の先輩は戦場で殺

されました。もう絶対に神様になるのはやめて下さい。京都

大學學生一同」これは同日、吉田分校前にたてられたプラカ

ードであつた。

西田、前掲論文。

倉田百三「念佛者のイデオロギー」「耻以上」「政治の宗教的

基礎」「大乘精神の政治的展開」等。

拙著「般若經」第二章「般若と平和」参照。

拙論「佛教における戦争體驗」各號参照。

新しい和合の論理・倫理の探究確立という學的關心、およ

びわたくしが意味する「淨化的反省」への課題意識からみて、

東大山崎正一教授の論稿「日本におけるキドイツ觀念論」の

位置解析（思想、一九六二年十二月）の後半は、私にとつ

て非常に示唆的である。

補 説 (四二頁本文) (につづく)

日本佛教と「聖戰」體驗（天皇制體驗と戦争體驗との統合）と
の、媒介点ないし融合点とは、禪的には「自己を忘る」（道元）で
あり、淨土教的には「他力」であつた。これが宣戰の「大詔奉
戴」として、具體化したのである。「さからうことなきを宗とせ
よ」の至上命法下の三寶を前提とする、「憲法十七條」第三條の
「承諾必謹」のマキシムは、帝國憲法第三條「天皇ハ神聖ニシテ
侵スベカラズ」の至上命法下の、「信教の自由」に直結した。こ
こから「天皇が戦えといわれたから戦い、戦いを止めよといわれ
たからやめる。」という「和」の論理と倫理、倉田百三の語法を
轉用するならば、「責任を神に歸する」無我の道がひらけた。こ
こには「心情の倫理」があつて、責任の倫理がない。くりかえし
ていえば、禪的には「得失是非、一時放却」「葛直進前」、淨土教
的には「善惡のふたつ總じてもて存知せざるなり。」「よきひとの
仰せをこうむりて、信ずるほかに別の仔細なきなり。」これが
「ことあげせず」の惟神の道に合體して、宣戰の「承諾必謹」に
おちついた。E・スノーは、かような生きかたを「崇高なまでの
無知」とよんだが、ここに民草の安心立命の道があつた。「戦え
と仰せられるれば戦い、止めよと仰せられるればやめる」、これが
「隨處に主となる」または「萬境に隨つて轉ず」ることであつた
が——禪者の脳波にみられる、外境への即應の神速がこれにつなが
る——この適應の無心道が、外境と主體とのステイックな一體觀
にたつ場合には、外境の變化と心變の變化とに、原理的な質差が
ないために、責任の倫理が流産となりがちである。

直觀主義の哲學・宗教は、理論信仰よりも實感信仰を助成する。敗戦の十五日以前と以後との挫折と轉向とは、いわば「忽然」として前後截斷的にあらわれるために、挫折・轉向の相をとどめない。ここではツマツキもツマツキではなく、挫折も挫折ではない。挫折も轉向も、無相のゆえに、十分に對自化されず、したがって課題的な緊張と持續とを形成するにいたらない。「佛法は無相を以て相とし、無念を以て念とし、無住を以て住とするから、いかなる時代の思想でも、これを抱括して、これを反撓することはない。現代思想また然りである。」（伊藤康安、大法輪、一九六〇年一月）ここには思索する者の痛みがない。——ここに道元の「時」のとらえかたにかんする、橋田邦彦「正法眼藏釋意」巻三の典型的な見方について、検討する必要がある。——情勢・局面の轉換とともに、「ハイソレマデ」ということになりにかねない。

以上の消息は、「絕對主體」「絕對自由」に生きていることが、相對的主體、相對的自由に生きることよりも、生活的には容易でありうる場合を暗示している。ここにあるものは「事」の哲學、「事」の宗教であつた。「事實」ないし「歴史的現實」の哲學・宗教は、世界史の現實のまゝに、「七火八裂」（田邊）に難破した。「絕對客觀主義」（西田）の哲學・宗教は、その主觀性をばくろせざるをえなかつた。これらは決してひとごとではない。戰爭體驗から、謙虛にかつきびしく學ばなくてはならない。

日本の佛教が、日本の國家神道を形而上的に深化することのなかで、みづからこの神道に癒着したことは、佛法を習うということに、日本神道に癒着した佛法を習う、という含みをもつ契機を

確立した。「大逆事件」（一九一〇年）の前後から右翼、軍人、政治家、神道者によつて唱えられていた「知育偏重の弊」は、大正デモクラシーの挫折のころから、ますます強調されたが、おなじ風潮が佛教界を支配した。佛教の否定道は、知的自己の立場・方法の拂拭と、理想主義的意志の立場・方法の拂拭を中核としたが、これは「知育偏重」論者のいう「知育」が、西歐近代の合理主義的個人主義ないし人本主義的理想主義の人間教育であつたことと、呼應する性格のものであつた。知的自己のほからいをはなれ、是非善惡を放下する佛道修行は、近代的自我の足場とメンタリティを放下して、「ことあげ」せぬ自然（じねん）の大道、「神ながらの道」に歸一することと、容易に一體化した。西田幾多郎によるデカルト的自我の深化超越が、國家神道への道をひらいたのも、倉田百三の「善惡を横に載る道」が、「神流れ」に歸入したのも、その例證である。近世日本の禪は神道を自家藥籠中のものとするによつて、かえつて神道の藥籠中のものとなつた。國家神道の中核をなす血統の問題を、眞に批判的にとりあげたことがなかつたからである。「國體明徴」と「聖戰」とに、禪が合流する宿命は、その由つてきたところ、遠いといわねばなるまい。